

生活、総合的な学習・探究の時間WG

取りまとめ（案） ①生活科

1. 現行の成果・課題を踏まえた改善の方向性

(1) 現状の成果

(2) 現状の課題

- ア. AI時代に求められる生活科の在り方に関する課題
- イ. 学びの質、学びの意欲に関する課題
- ウ. 幼児教育や中学年以降との接続と教科横断性の課題
- エ. 生活科固有の課題

(3) 改善の方向性

- ア. 生活科の「本質的意義」の再定義
- イ. 目標及び見方・考え方の在り方
- ウ. 内容の在り方

2. 目標及び見方・考え方の在り方

(1) 目標の在り方

(2) 見方・考え方の在り方

3. 資質・能力の構造化のポイント

(1) 内容の表形式化

(2) 高次の資質・能力

4. 内容の改善の在り方

(1) 内容の充実について

- ア. 幼児教育と小学校教育との接続
- イ. 教科横断の在り方
- ウ. 中学年以降との接続

(2) 生活科の特質を踏まえた教育課程編成上の工夫

5. 学習・指導・評価の改善充実の在り方

(1) 生活科固有の課題への対応

- ア. 身体性を伴う体験活動の充実
- イ. 動物飼育の在り方
- ウ. 外部人材・地域との連携

(2) ICT活用について

(3) 学習評価の在り方

- ア. 生活科における観点別評価の考え方
- イ. 生活科における「学びに向かう力、人間性等」の考え方

1. 現行の成果・課題を踏まえた改善の方向性①

(1) 現状の成果

- 現行学習指導要領において、生活科では、「具体的な活動や体験を通して、身近な生活を自分との関わりで捉え、よりよい生活に向けて思いや願いを実現することで、自立し生活を豊かにすること」を目標として、学習内容を以下の三つに整理した。
 - 児童の生活圏としての環境に関する内容
 - 低学年の時期に体験させておきたい活動に関する内容
 - 自分自身の生活や成長に関する内容
- 具体的には以下の見直しを図った。
 - 幼児期や中学年以降の学習とのつながりを踏まえ、育成する資質・能力が具体的になるよう見直し
 - 活動や体験を通して気付いたことを多様に表現し考えたり、「見付ける」「比べる」「たとえる」「試す」「見通す」「工夫する」などの多様な学習活動を行ったりする活動を重視
 - 他教科等との関連を積極的に図り、低学年教育全体の充実を目指すとともに、中学年以降の教育に円滑に移行することを明示
 - 幼児教育における遊びを通した学びから、各教科等における、より自覚的な学びへと円滑に移行できるよう、生活科を中心とした合科的・関連的な指導などによる「スタートカリキュラム」を行うことを明示
- こうした改善の成果として、児童の興味・関心を生かし、内容に示された資質・能力を身に付ける授業改善に進捗が見られる。

(2) 現状の課題

ア. AI時代に求められる生活科の在り方に関する課題

<a.生活科の学びの本質を踏まえた指導の重要性>

- 小学校低学年の児童は、具体的な活動を通して思考するという発達上の特徴がある。児童は試行錯誤したり繰り返したりして、対象に何度も関わりながら、身体全体で学ぶ。こうした特性を踏まえ、生活科の学びにおいては、児童が身体を通した体験をすることで、身近な生活と自分との関わりを実感し、対象と自分との関係性に気付くことが大切である。この気付きの質を高める観点から、体験活動や表現活動を通して学習対象との関わりを深める中で、好奇心や探究心を育み、豊かな感性を養い、自立し生活を豊かにすることが期待されている。

<b.身体性を重視した直接体験の重要性>

- デジタル技術の進展により、ともすれば仮想空間における活動ばかりが増えてしまいがちなお中において、身近な人々、社会及び自然との関わりをリアルに認識することが、これまで以上に求められている。そのためにも生活科では直接体験を通じて身体で対象と関わることが期待されているが、現状では、学校内外でこうした直接体験の機会が減少している（国立教育政策研究所「令和4年度小学校学習指導要領実施状況調査」、（独）国立青少年教育機構「青少年の体験活動等に関する意識調査（令和4年度調査）」）。

<c.言葉や絵、動作など多様な表現に基づく認識の重要性>

- インターネットやSNSなどを通じて得られるバーチャルな情報が溢れている中で、児童が能動的に身近な人々、社会及び自然との関わりを深めるとともに、発達に相応しい表現活動によって対象を認識し、自らの変容や成長について実感することがこれまで以上に重要である。このため、生活科では、直接体験に加えて、言葉や絵、動作など多様な方法で表現し、気付きの質を高める（「深い学び」を実現する）活動の重要性が高まっている（日本生活科・総合的学習教育学会「生活科で育った学力についての調査研究（令和6年科研費）」）。

1. 現行の成果・課題を踏まえた改善の方向性②

(2) 現状の課題（続き）

イ. 学びの質、学びの意欲に関する課題

- 現行の学習指導要領において、「主体的・対話的で深い学び」の実現が求められており、児童一人一人の思いや願いを生かした学習活動が多く各学校で行われている一方で、それらが「深い学び」につながるイメージがもちにくいといった課題も見られる（「令和4年度小学校学習指導要領実施状況調査」）。
- 安全面への配慮や時間的制約から地域に出かける活動が減り、地域の人々、社会及び自然を一体的に扱う学習が難しくなっている。その結果、児童の思いや願いに基づく必然性のある学習活動を展開しにくい状況が見られる。
- 学習意欲の低下が課題として指摘されており、学びに主体的に向かえていない児童が一定数いる状況を踏まえ、生活科では「なぜ？」「やってみよう！」という好奇心や探究心を高める学習活動を行い、子供一人一人の学習活動に活かすことが重要である（ベネッセ教育総合研究所「子どもの生活と学びに関する親子調査2024」）。

ウ. 幼児教育や中学年以降との接続と教科横断性の課題

- 約65%の市町村で幼稚園等と小学校との連携・接続の取組が不十分である実態がある中で、幼児教育での学びが小学校での学びに十分に活かされていない状況が見られるなど、幼児教育と小学校生活科との接続に依然として課題がある。（「令和7年度幼児教育実態調査」）
- 生活科の学びを中学年以降の社会科や理科、総合的な学習の時間などにつなげる必要があるが、中学年以降の教育への接続を意識した指導計画の作成や実際の指導を行っている学校が多く見られる一方で、不十分な学校もあり、十分に実現できていない状況も見られる。
- 合科的・関連的な指導が入学当初の時期に限定され、年間を通じた取組となっていない場合が多いため、生活科と他教科等の学びのつながりが一過性のものとなっているなど、合科的・関連的な指導の取組に課題がある。

エ. 生活科固有の課題

- 生活科を取り巻く状況が変化中、飼育活動や地域と関わる活動などにおいては、その意義も踏まえつつ、適切な環境確保や継続性など様々な観点からの配慮が必要となっている。また、十分な経験やスキルを持つ教師の育成が課題となっている。

1. 現行の成果・課題を踏まえた改善の方向性③

(3) 改善の方向性

補足イメージ①②③参照

A. 生活科の「本質的意義」の再定義

- AIで代替できない「実感を伴う知」を育み、「深い学び」を実装する人間的な学び方を体得する教科として、生活科の本質的意義を以下の4つで整理し、それらを踏まえて教育課程を改善する。

①身体性

身体を通して対象と関わることで、見る、聞く、触れる、嗅ぐなどの諸感覚を通して対象を捉えるとともに、直接的な関わりによって実感的な認識が得られるようにする。AIを含む仮想空間における情報の受容ではない、「身体で身近な生活を捉える」体験や活動を、自分の外に広がる世界との確かな接点をもつ出発点とする。

②対象と自分との関わり

見る、聞く、触れる、嗅ぐといった働きかけによって、身近な物事の変化を実感し、試行錯誤する中で、「自分が動く対象となる身近な物事が変わる」という経験が、好奇心や探究心を生み、身近な人々、社会及び自然のよさや特徴などに気付き、それらを大切に思いながら自分との関わりを意識することに繋げる。

③他者と自分との関わり

他者との関わりを通して、互いの力を出し合う経験を重ねる中で、相手の思いに気付き、受け止め、尊重する態度を育むとともに、他者と共に生活する自分の存在を明らかにする。さらに、関わる対象を身近な人から地域・社会へと広げる。

④自己認識

生活科の学びでは、活動を通して「やってみたい」という気持ちが生まれ、自分で考え行動する主体性や自立性を育む。「自分はどう感じる・考える」ことを生かした学習活動を繰り返す中で、場面や状況に応じて自己調整するとともに、自らの変化や成長に目を向けることで、自分自身のよさや可能性に気付く機会を提供する。

イ. 目標及び見方・考え方の在り方

- 目標の柱書については、現行の記載にある児童が行う「具体的な活動や体験」を明確にするため、本質的意義として整理した「身体性」の観点を明確にする。
- 資質・能力の柱ごとの目標は、以下のとおり明確にする。
 - 知識及び技能：他者との関わりを通して、気付きを自覚したり、自分自身と対象との関わりに気付いたりして「深い学び」に向かうことを端的に表す表現を入れる
 - 思考力、判断力、表現力等：気付きや実感を基に繰り返し考え、自分の考えを生み出すことや、外化・統合に向けて多様に表現することを明確にする
 - 学びに向かう力、人間性等：身近な人々、社会及び自然に自ら関わり、他者と一緒に活動したり、状況に応じて働きかけたりして、生活をよりよくしていこうとする意欲や態度を育成することを明確にする
- 見方・考え方については、「事象や対象」「物事を捉える視点」「考え方や判断の仕方」を、生活科の本質的意義として整理した4つの視点を踏まえるようにする。

ウ. 内容の在り方

- 生活科における資質・能力については、現行学習指導要領の目標に掲げているとおり、「知識及び技能の基礎」、「思考力、判断力、表現力等の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱として整理して捉えることができる。
- その上で、生活科における資質・能力の構成や育成の在り方については、三つの柱を個別・独立に育成しようとするよりも、具体的な活動や体験を通して、相互に関わり合いながら一体的に立ち上がり、生活科の学びの中で育成されていくことが期待されるものであり、自立し生活を豊かにしていくことにつながるものとして整理する。

※なお、具体的な内容の改善については、生活科の本質的な意義を踏まえ、必要に応じて見直しを行うことを検討する。

2. 目標及び見方・考え方の在り方①

(1) 目標の在り方

補足イメージ③参照

- 柱書については、1. (3) アで整理した本質的意義を踏まえ、現行の「具体的な活動や体験」を「身体性を伴う体験と多様な表現活動」と改める。このことにより、体験を通した内化と、言葉などの多様な表現活動による外化とが往還することを明確にする。こうした学習過程を通して、身体性を伴う実感的な理解と表現による認識の高まりを繰り返しながら、抽象的な理解の足掛かりとしていく低学年の特性を活かした学びの充実を目指す。
- 「知識及び技能」については、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさに気付くことに加え、他者との関わりを通して、新たに対象の特徴やよさに気付いたり個別の気付きが関連付けられたりすることで「深い学び」に向かうなど、身近な生活と自分との関わりに気付くことを目標として位置付ける。

例：子供は、植物に水をやりながらも、水をやると植物は成長するという関係には気付いていないこともある。しかし、植物を育てていることを言葉や絵などで表現することで、「植物の成長には水が必要である」ことを自覚する。さらに、「成長には水などが必要である」という植物と自分との共通点を関連付けることで、植物の成長には必要な条件があることに気付きを深めていく。

- 「思考力、判断力、表現力等」については、児童一人一人の気付きや実感を基に考えを巡らせることにより、思考力、判断力、表現力等を育成する過程を明確に示す。また、深い学びを実現する観点から、目標の柱書に示されている「表現活動」を、発達に相応しい多様な方法によって学びを外化・統合する重要な要素として明確に示す。
- 「学びに向かう力、人間性等」については、①育みたい学びや生活に向かう態度として、「やってみたい」、「してみたい」、「不思議だな」と感じ、自ら進んで関わろうとすることや、他者との関わりの中で活動すること、場面や状況の違いに応じ関わり方を調整することなどの態度の育成を明確化する。②当該教科等の学習で育みたい情意・感性として、意欲や自信をもって学びや生活を豊かにしようとする姿として明確化する。

2. 目標及び見方・考え方の在り方②

(2) 見方・考え方の在り方

補足イメージ③参照

- 各教科等の資質・能力が身に付く中で、身近な人々、社会及び自然を見る視点や考え方が豊かになり、よりよい社会や幸福な人生につなげていけることを「見方・考え方」によって示す。
- 生活科は、体験活動や身近な人々、社会及び自然、自分との関わりが重要であることを踏まえ、それらを通して最終的に育成すべき資質・能力へと導くものとなる「見方・考え方」を明確にするため、目標との関連を考慮しつつ、本質的意義の中核として、以下のとおり位置付ける。
- 「見方・考え方」については、①「教科で扱う事象や対象」、②「教科固有の物事を捉える視点」、③「教科固有の考え方や判断の仕方」で構成される。生活科の本質的意義として整理した4つの視点を踏まえ、以下のとおり整理する。
 - ①教科で扱う事象や対象
「身近な人々、社会及び自然」とすることで、児童は身体で身近な生活を捉え、実感する
 - ②教科固有の物事を捉える視点
「自分との関わりで捉える」とすることで、児童は生活における身近な人々、社会及び自然などの対象と自分がどのように関わっているのかという視点で対象を捉える
 - ③教科固有の考え方や判断の仕方
「よりよい生活に向けて思いや願いを実現しようとする」とすることで、思いや願いを実現していく過程において体験と表現を往還させながら、自分自身や自分の生活について考えるとともに、他者の思いや願いを尊重し、自立し生活を豊かにしていく

3. 資質・能力の構造化のポイント

(1) 内容の表形式化 補足イメージ③参照

- 生活科の学びは、児童一人一人の身体性に根差した具体的な活動や体験を起点として成立し、児童が対象や他者と関わりながら得る気付きや実感を通して、自分の生活を捉え直し、生活をよりよくしていこうとする学びとして展開される点に特質がある。
- こうした学びにおいては、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」は、活動や体験の中で相互に関わり合いながら一体的に立ち上がり育成されていく。
- 仮に、学習内容をこれらの資質・能力の三つの柱ごとに分節して示した場合、それぞれの資質・能力の育成を主眼とした学習活動が構成されやすくなり、「気付き、考え、行為することが連続して次の生活へとつながっていく」という生活科が重視している学びの過程が、学習活動の構成上、十分に位置付けられにくくなる恐れがある。
- その結果、児童一人一人が、活動や体験を通して得た気付きや実感を基に思いや願いをもち、自分の生活を捉え直し、生活をよりよくしていこうとする生活科固有の学びが形骸化し、生活科として意図する資質・能力が、生活に根差した力として十分に育成されにくくなることが考えられる。
- このため、生活科の内容の示し方については、並列パターンをイメージしつつ、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」を一体として一文で記載することとする（資質・能力の3つの柱に分けて内容を示さない現行の方針を継続）。
- ※ 現行において、生活科の資質・能力のうち「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」の資質・能力の末尾に「の基礎」とあるのは、育成を目指す三つの資質・能力を明確に分けることが困難であることによる。このことを踏まえ、引き続き、幼児教育と同様に、「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」と示すこととする。

(2) 高次の資質・能力 補足イメージ③、⑬-1、⑬-2参照

- 生活科は、具体的な活動や体験を通して学ぶとともに、自分と対象との関わりを重視するという生活科の特質を基に、9項目の内容を共通性のあるまとまりごとに、3つの階層で表している。この整理は引き続き妥当であると考えられ、高次の資質・能力の設定も3つの階層ごとに次のように設定する。
 - 第1の階層は、児童の生活圏としての環境に関する内容である。児童が学校、家庭及び地域に関わる中で自分の生活への意識をもちながら、自分の生活が支えられていることに気付きを深め、対象に親しみや愛着をもって行動する。
 - 第2の階層は、低学年の時期に体験させておきたい活動に関する内容である。児童が身近な人々、社会及び自然に働きかける中で比べたり試したり工夫したりしながら自分の生活がよりよくなることに気付きを深め、生活を楽しむ。
 - 第3の階層は、自分自身の生活や成長に関する内容である。児童がこれまでの生活や学びを通じた自分の成長を振り返る中で自分の過去・現在を見つめ、未来を見通しながら、他者への感謝や自分のよさ、可能性への気付きを深め、意欲的に生活する。
- このように具体的な活動や体験の中で考えを巡らせ、気付きを深め、肯定的な心情を育むという「深い学び」となっていく。このことを踏まえ、高次の資質・能力は、それらの個別の資質・能力の集合体として一文で記載することとする。

※高次の資質・能力の具体的なイメージは、16ページのとおりだが、WGでのイメージをもとに、取りまとめの趣旨を踏まえた分かりやすく使いやすい内容となるよう、引き続き文部科学省で検討すべきである。

4. 内容の改善の在り方①

(1) 内容の充実について 補足イメージ④⑤⑥⑦参照

- 幼児教育、中学年以降との接続、各教科等との関連を図る際には、活動や対象等でつながりを考えるだけでなく、資質・能力の関連で捉えることが重要。

ア. 幼児教育と小学校教育との接続

- 幼児教育と小学校教育との接続に当たっては、幼児期の遊びを通じた体験を生かした小学校のカリキュラムとして編成することが重要であり、各小学校において以下の取組が進むよう必要な見直しを行うとともに、過度な負担なく地域の実情に応じた取組が可能となるよう、学校現場がそのまま活用できるような多様なモデルを国として示しつつ、それらに留まらない更に多様で豊かな実践を支援する。また、その効果を検証し、改善に生かす。その際、他学校種間の接続への活用も併せて検討する。

① 架け橋期のカリキュラムとスタートカリキュラムの関係性を見直し

- ・スタートカリキュラムは各学校で作成することを求める一方で、架け橋期のカリキュラムは全ての学校で作成することを求めていることから、両者の関係性が分かりにくくなっている。そのため、架け橋期のカリキュラムは、幼児教育施設における5歳児のカリキュラムと小学校における1年生のカリキュラム（スタートカリキュラム）の総称として位置付けるなど、概念を整理する。このことにより、教育の連続性・一貫性の確保につなげる。

② スタートカリキュラムの理解・運用の促進

- ・スタートカリキュラムの対象とする時期は学校や児童の実態に応じて柔軟に設定可能であることを明確化し、様々な実施形態を例示することで、その理念や指導の工夫を意識したスタートカリキュラムを編成しやすくする。
- ・合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定を行うなどの工夫の具体的事例、スタートカリキュラムを編成する視点を示し、実践のイメージを共有する。
- ・質の高いスタートカリキュラムの授業や生活場面を動画等で発信し、研修に活用する。

③ 学校全体で取り組む体制づくり・外部連携の充実

- ・管理職の理解を深め、校内研修や校内での接続を推進する担当者を校務分掌に位置付けたり、架け橋期のコーディネーターを活用したりするなど、学校全体で幼児教育との接続を推進する体制を整える。
- ・合同研修や保育・授業参観など、幼児教育施設と小学校が相互に学び合う機会を充実する。
- ・スタートカリキュラムの編成に当たっては、上記の国のモデルを参考にしつつ、幼児教育で育まれた資質・能力について、幼児教育施設と小学校の関係者が対話をするための資料（「対話のための資料」）を活用しながら、対話を通じて互いの教育への共通理解を図り、幼児教育と小学校教育との学びのつながりを意識した実践の改善を図る。

イ. 教科横断の在り方

- 各学校において以下の取組が進むよう必要な見直しを行うとともに、実践事例等で示すことを検討する。

① 年間を通じた接続の「見える化」

生活科を結節点として、各教科等との関連をスタートカリキュラムや年間指導計画の中に明確に位置付け、1年間を見通した合科的・関連的な指導の工夫を計画的に実施するよう促す。

② 各教科等の資質・能力とのつながりを意識した指導の充実

生活科の学習活動において、各教科等の資質・能力とのつながりを意識して学習過程を構想するよう促す。

（例：生活科の活動ごとに、活用・発揮される各教科等の資質・能力を整理し、指導の意図を明確にした単元設計など）

生活科の活動	国語	算数	図画工作
見つける	言葉に着目する	数・量で捉える	形や色で捉える
話す・聞く	伝え合う	比べて説明する	イメージを共有する
作る	順序立てて説明する	数や形を活用する	想像しながら表現する

※生活科の活動と各教科とのつながりのイメージ

4. 内容の改善の在り方②

ウ. 中学年以降との接続

- 各学校において以下の取組が進むよう解説の記載を充実するとともに、実践事例などで示すことを検討する。その際、教育課程全体の中で中学年以降への教育に円滑につながる指導計画を作成することや、学習過程や教師の働きかけなど実施上の留意点を共有する。
- **生活科の特質を踏まえた身体性を伴う体験の充実**
身近な人々、社会及び自然との関わりの中で、身体性を伴う体験を充実させるという生活科の特質を大切にする。その体験を通して得られた気付きや実感が中学年以降の教科等の学びの基盤となることを意識した指導を充実させる。
- **中学年以降への教育へ円滑につながる表現活動の充実**
多様な表現によって、学習対象への気付きの質を高めるようにすることを通して、言葉による認識を促し、中学年以降の教科等へ発展する学びの接続を意識した指導を充実させる。
(例：多様な表現から言葉による認識への移行を意識した指導計画の工夫など)
- **社会科、理科、総合的な学習の時間への接続を意識した指導の充実**
社会科や理科の内容の単なる先取りではなく、生活科の学習過程の中で、社会科、理科、総合的な学習の時間への接続を意識した指導を行い、引き続き社会認識、自然認識、自己認識の形成につながるようにするとともに、横断的・総合的に学ぶ生活科の体験と表現の往還を通して、対象と自分との関わりを深める指導を充実させる。

(2) 生活科の特質を踏まえた教育課程編成上の工夫

補足イメージ⑦参照

- 生活科においては、内容（１）～（９）を固定的・均等に扱うのではなく、児童や地域、学校の実態に応じて各学校が創意工夫を生かした教育課程を編成することが重要である。
- その際、各教科等との関連を図りながら、各教科等で身に付けた資質・能力を生活科における具体的な活動や体験の中で活用し、つながりあるものとして単元を計画したり、生活科における活動や体験を各教科等の学習の動機付けや、納得や実感につなげたりすることが重要である。
- また、調整授業時数制度の活用を踏まえ、複数の内容を組み合わせた単元構想とすること、単元と単元のつながりを意識したストーリー性を重視すること、２年間を見通した学習活動とすること等により、必要以上に内容が重なることなく、時間的にも効率よく学習を進める等の工夫が考えられる。
- このような調整授業時数制度の活用によって、児童の実態や学校の特徴を生かしたスタートカリキュラムを編成し、充実していくことも考えられる。

5. 学習・指導・評価の改善充実の在り方①

(1) 生活科固有の課題への対応

ア. 身体性を伴う体験活動の充実

- デジタル技術の進展により、とすれば仮想空間における活動ばかりが増えてしまいがちな中において、実感をもちながら行う身体性を伴う体験活動は、学習対象や学習活動への興味・関心を広げたり、これまで気付かなかった事柄や新たな対象との出会いを生み出したりするものであり、より一層その必要性が高まっている。また、その中で生まれる驚きや感動は、次の活動への思いや願いを高めるとともに、継続的に関わろうとする意欲につながる効果も期待できる。
- また、学習対象に繰り返し関わる中で、生活上必要な習慣や技能が身に付く。例えば、植物の栽培や動物の飼育、公共施設の利用、地域の人々との交流などの体験を通して、適切な行動の仕方や基本的な技能を実感を伴って習得することができる。こうした習慣や技能は、日常生活の中で繰り返し活用されることで確かなものとなる。
- このようなことを踏まえ、身体性を伴う体験活動をより一層充実する。その際、以下の点について留意が必要である。
 - 体験できる時間や場を十分に確保すること
 - 思いや願いをもって対象へ働きかけられるようにすること
 - 体験と表現の往還によって気付きの質を高めること
 - 試す・比べる・工夫するなどの学習活動を位置付けること
 - 一人で没頭したり、友達や大人と一緒に活動したりするよさを踏まえること
 - 日常と非日常のそれぞれの体験のよさを踏まえること
- これらを具体的に実現するために、指導計画に位置付けられるよう実践事例等を示すことを検討する。

イ. 動物飼育の在り方

補足イメージ⑧-1、⑧-2 参照

- 学校で動物を飼育することは、児童が生命あるものに継続的に関わる中で興味・関心をもち、その変化や成長を自らの感覚で捉えることを通して、生き物への親しみと生命の尊さを実感的に理解するための重要な学習活動であり、特にAI時代においては、児童が動物との直接的な関わりを通して実感を伴って理解する身体性を伴う体験として、動物飼育は引き続き重要である。
- 一方で、休日等を含む管理体制の確保、獣医師等の専門家との連携、疾病・負傷時の対応体制や必要な予算の確保、繁殖制限や災害時対応を含む適切な飼育環境の整備、教職員に過度な負担が生じない配慮など、様々な観点から配慮をすることが必要である。
- このような観点も踏まえ、地域や学校の実態に応じた柔軟な運用を行えるよう、学校で動物飼育を行うことを基本としつつ、動物への親しみをもったり命を大切にしたりしようとする心情が育まれることが見込まれるなど、動物飼育の意義を達成することができると見込まれる以下のような場合においては、学校での飼育を行うことと同等の扱いであることを明確化する。
 - 他の所有者から借用して飼育を行うこと（ホスティング）
 - 休日等を含む管理体制の確保など適切な飼育環境の確保が困難である場合において、近隣の動物関連施設や民間の団体等が保有する動物に、児童が継続的に触れ合う機会を設けること
- また、学校における適切な管理を促すため、好事例を共有するとともに、教師用手引きの見直しを行う。
- 併せて、飼育する動物は現行と同様に、魚や昆虫など、哺乳類や鳥類に限らない旨を明確化する。

5. 学習・指導・評価の改善充実の在り方②

ウ. 外部人材・地域との連携

- 地域の教育資源を活用した学習活動が展開される中で、外部人材や地域との連携強化をより一層図る必要があるため、教職員の過度な負担が生じないよう配慮しつつ、以下の取組を促す。

①継続的な連携体制の構築

外部人材や地域との連携を、単発としての体験ではなく、1年間を見通した学習の中に位置付け、繰り返し関わる関係として構築する。例えば、年間指導計画において、同一の人材・施設との複数回の関わりを位置付け、児童の思いや願いの実現に向けて、再訪・再交流の機会を設定する。

②準備時間の確保・調整の仕組みの構築

外部人材や地域との連携に必要な事前の打合せや意図の共有が円滑に行われるよう、時間の確保と調整の仕組みを整える。例えば、事前打合せを標準化する（簡易な共有シートの活用等）。

【例】：ねらい／活動内容／子供の実態／留意点

短時間でも共有できるミニ打合せ（オンライン・電話等）の活用
校内での役割分担（連携担当の明確化）

③設置者及び学校としての組織的な連携体制の構築

外部人材や地域との連携について、学校の全教職員で共通理解が進むように、連携するよさや次年度への引継ぎを組織的に推進する。また、設置者においては、地域人材・施設のリスト化・データベース化・特色の把握による域内の横展開を図る等、各学校における取組が進むよう支援を行う。

【例】：生活科に限らず、他学年・他教科等との接続も視野に入れた活用
校内研究やカリキュラム・マネジメントの中での位置付け
実践事例（単元・連携方法）の校内共有・蓄積

- また、外部人材・地域との連携のみならず、保護者との連携を図ることにより、学校での学びを家庭生活にも生かせるようにすることも重要。

（2）ICT活用について

補足イメージ⑨⑩参照

- 生活科におけるICT活用は、身体性を伴う体験をより一層豊かにしていくものであり、直接体験を代替するものではないことを前提とした上で、ICT活用を、生活科の本質的意義をより深化させ、体験・認識・表現の質を高めるための補助・促進する手段と位置付ける。（例えば、AI要約を含む検索機能等を活用して、事前に情報を調べた上で対象に関わったり、体験をして感じたこと・不思議に思ったこと等をICTを活用して調べたり振り返ったりすることで、体験・認識・表現の質がより高まることも考えられる。）

①体験の質を高める

諸感覚を働かせながら撮影・記録を何度も体験し、拡大したり様々な視点で観察したりしつつ、改めて対象との関わりを深めようとするとともに、時間・空間を超えて体験することで、体験の質を高める。（特に、繰り返しの体験が重要。）

②認識の質を高める

画像や動画の視聴によって、対象を比較したり捉え直したりし、それらを言語化し、対話によって考えを巡らすとともに、児童自身が学習対象や活動を記録し、その後の学習に活用する中で、自分の変容や成長に着目したり、振り返ったりすることで、認識の質を高める。

③表現の質を高める

音声や画像で簡便にもしくは精緻に表現したり、思いや願いをもって交流したりすることで、表現の質を高める。

- また、幼児教育から総合的な学習の時間へと連なる学習の質の高まりを促進する学習基盤として位置付ける。

5. 学習・指導・評価の改善充実の在り方③

(3) 学習評価の在り方 補足イメージ⑪⑫参照

ア. 生活科における観点別評価の考え方

- 各教科においては、3つの資質・能力を明確に分けて示すことでその確実な育成を図ることとしており、生活科においても目標の水準では3つの資質・能力を書き分けている。一方で、生活科は、幼児期からの発達や学びの連続性を意識し、児童一人一人の身体性に根差した具体的な活動や体験を起点として学びを成立させることで、児童が対象や他者と関わりながら得る気付きや実感を通して、3つの資質・能力を一体的に育成していく点にその特質がある。
- その特質を十分に発揮するためには、資質・能力の柱ごとに学習活動が分断されることは適切ではないと考えられることから、生活科における内容の示し方は、3つの資質・能力を明確にした上で、学習活動と一体となって育成される資質・能力の姿を一文で示す形式が適切である。
- このような生活科における学習活動の特質や内容の示し方を踏まえ、学習評価においても3つの資質・能力を一体的に見取っていくという整理が考えられる一方で、3つの資質・能力を明確に示していることから、以下の点を考慮しながらその在り方を整理することが必要である。
 - 生活科は教科として位置付けられているとともに、その学びは、社会科及び理科の土台となる性質を有しており、資質・能力の確実な育成を図りその後の教科学習に生かしていくことが重要であること
 - 生活科の内容は一文で示されているものの、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」に関する内容がその中で明確に規定されており、それぞれの視点で見ることより分析的に適切に見取ることができること
- このようなことを踏まえ、内容においては資質・能力について一体的に示すこととしつつ、学習評価においては、他教科等と同様に、観点別評価を行うこととする。その際、児童一人一人の発達や学びの過程を捉え、そのよさや成長を見取することを基本とし、幼児教育や総合的な学習の時間の学びとの継続性を踏まえた視点で評価を行うことにも留意が必要である。

- 学習評価のプロセスは、総則・評価特別部会での整理を踏まえ、単元ごとの評価は形成的評価を中心に行うこととし、年度末・学期末等において総括的な評価を行うよう促す。

イ. 生活科における「学びに向かう力、人間性等」の考え方

- 「学びに向かう力、人間性等」の評価に当たっては、生活科の学習過程全体を通じた一人一人のよさ、変化や成長を丁寧に見取る個人内評価とする。
- その際、生活科では、各内容の「学びに向かう力、人間性等」を参考にして単元の目標が設定されることを踏まえ、教育課程企画特別部会で示された「見取る姿（仮称）」を参考にして単元ごとの「学びに向かう力、人間性等」を見取り、総合所見欄等に反映する。
- その上で、思考・判断・表現の過程において、「見取る姿（仮称）」に示す行動の「継続的な発揮」を見取ることができた場合には、「思・判・表」に「○」を付すことで評価する。
- なお、生活科の「学びに向かう力、人間性等」の評価に当たっての「見取る姿（仮称）」は以下のような事項として示す。
 - 思いや願いをもった働きかけ
 - 他者との伝え合いや協働
 - 試行錯誤や自己調整

※単元ごとの「学びに向かう力、人間性等」の育成を重視するとともに、「見取る姿（仮称）」の継続的な発揮を見取り、形成的評価を充実させることについては、今後、告示文や学習指導要領の解説等を作成していく過程で、分かりやすく示していくことが重要。

生活科の「本質的意義」再定義：知を創る学びへの転換

- 生活科における深い学びとは、身体を通して対象と関わり、感じ取ったことを他者との対話や表現を通して捉え直し、自分なりの意味や価値を創り出していく学びの過程である。体験と表現の相互作用を通して気づきを深めていく営みは、まさに生活科に本来備わってきた意義である。
- そのことを踏まえ、生活科の本質的意義を明確にし、それが学校教育において発揮する教育的価値、位置付けを明らかにするとともに、深い学びを実装するための視点として「4つの本質的意義」を体系的に整理。人間的な学びを実現するために、以下の4つの観点を本質的意義として位置付ける。

生活科がもつ4つの〈本質的意義〉

① 身体性

- 身体を通して対象と関わることで、見る、聞く、触れる、嗅ぐなどの諸感覚を通して対象を捉えるとともに、直接的な関わりによって実感的な認識が得られるようにする。AIを含む仮想空間における情報の受容ではない、「身体で身近な生活を捉える」体験や活動を、自分の外に広がる世界との確かな接点をもつ出発点とする。

② 対象と自分との関わり

- 見る、聞く、触れる、嗅ぐといった働きかけによって、身近な物事の変化を実感し、試行錯誤する中で、「自分が動く対象となる身近な物事が変わる」という経験が、好奇心や探究心を生み、身近な人々、社会及び自然のよさや特徴などに気づき、それらを大切に思いながら自分との関わりを意識することに繋げる。

③ 他者と自分との関わり

- 他者との関わりを通して、互いの力を出し合う経験を重ねる中で、相手の思いに気づき、受け止め、尊重する態度を育むとともに、他者と共に生活する自分の存在を明らかにする。さらに、関わる対象を身近な人から地域・社会へと広げる。

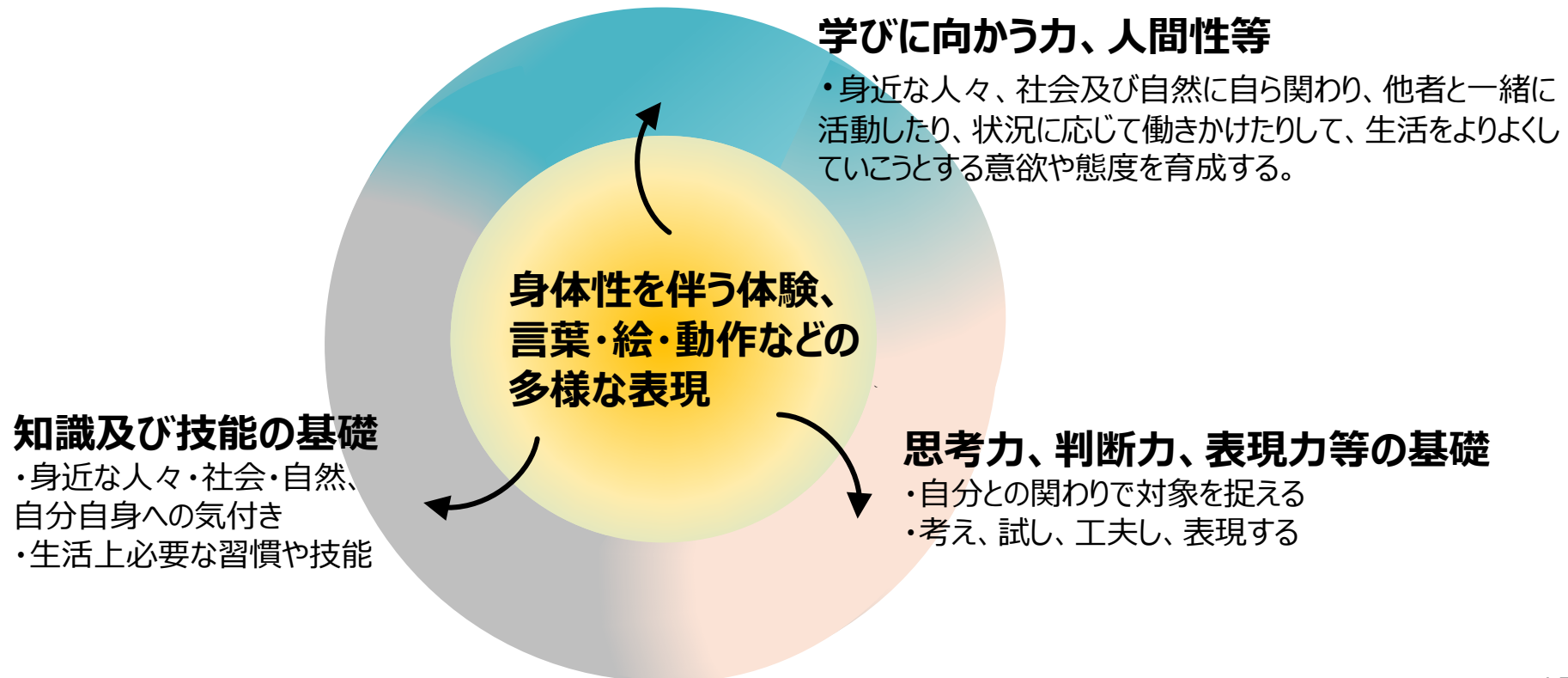
④ 自己認識

- 生活科の学びでは、活動を通して「やってみたい」という気持ち生まれ、自分で考え行動する主体性や自立性を育む。「自分はこう感じる・考える」ことを生かした学習活動を繰り返す中で、場面や状況に応じて自己調整するとともに、自らの変化や成長に目を向けることで、自分自身のよさや可能性に気づく機会を提供する。

生活科における資質・能力の構成について（イメージ）

- 生活科における資質・能力については、現行学習指導要領の目標に掲げているとおり、「知識及び技能の基礎」、「思考力、判断力、表現力等の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱として整理して捉えることができる。
- その上で、生活科における資質・能力の構成や育成の在り方については、三つの柱を個別・独立に育成しようとするよりも、身体性を伴う体験と言葉・絵・動作などの多様な表現活動を通して、相互に関わり合いながら一体的に立ち上がり、生活科の学びの中で育成されていくことが期待されるものであり、自立し生活を豊かにしていくことにつながるものとして整理する。
- このため、生活科における内容の示し方については、並列パターンをイメージしつつ、学習活動と一体となって育成される資質・能力を包括的に示す。

到達像：自立し生活を豊かにしていく



柱書

自立し生活を豊かにしていくための資質・能力について、身体性を伴う体験や多様な表現活動を通して、次のとおり育成することを目指す。

知識及び技能の基礎

- 活動や体験の過程において、自分自身や身近な人々、社会及び自然の特徴やよさに気付くとともに、他者との関わりを通してそれらの気付きを深め、生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。

思考力、判断力、表現力等の基礎

- 身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、気付きや実感を基に自分自身や自分の生活について考えを巡らせ、多様に表現することができるようにする。

学びに向かう力、人間性等

- 身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、他者と協働し、状況に応じて関わり方を調整するとともに、意欲や自信をもって、学びや生活を豊かにしようとする態度を養う。

見方・考え方

- 身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、よりよい生活に向けて思いや願いを実現しようとする

高次の資質・能力

学校、家庭及び地域の生活に関する内容

高次の資質・能力

学校、家庭及び地域との関わりの中で、自分の生活が支えられていることへの気付きを深め、それらに親しみや愛着をもって行動できる。

身近な人々、社会及び自然と関わる活動に関する内容

高次の資質・能力

身近な人々、社会及び自然への働きかけの中で、自分の生活がよりよくなることへの気付きを深め、生活を楽しくすることができる。

自分自身の生活や成長に関する内容

高次の資質・能力

これまでの生活や学びを通じた自分の成長の振り返りの中で、他者への感謝や自分のよさ、可能性への気付きを深め、意欲的に生活できる。

内容項目例

(1) 学校と生活

学校生活に関わる活動を通して、学校の施設の様子や学校生活を支えている人々や友達、通学路の様子やその安全を守っている人々などについて考えることができ、学校での生活は様々な人や施設と関わっていることが分かり、楽しく安心して遊びや生活をしたり、安全な登下校をしたりしようとする。

(2) 家庭と生活

家庭生活に関わる活動を通して、家庭における家族のことや自分でできることなどについて考えることができ、家庭での生活は互いに支え合っていることが分かり、自分の役割を積極的に果たしたり、規則正しく健康に気を付けて生活したりしようとする。

(3) 地域と生活

地域に関わる活動を通して、地域の場所やそこで生活したり働いたりしている人々について考えることができ、自分たちの生活は様々な人や場所と関わっていることが分かり、それらに親しみや愛着をもち、適切に接したり安全に生活したりしようとする。

内容項目例

(4) 公共物や公共施設の利用

公共物や公共施設を利用する活動を通して、それらのよさを感じたり働きを捉えたりすることができ、身の回りにはみんなで使うものがあることやそれらを支えている人々がいることなどが分かるとともに、それらを大切に、安全に気を付けて正しく利用しようとする。

(5) 季節の変化と生活

身近な自然を観察したり、季節や地域の行事に関わったりするなどの活動を通して、それらの違いや特徴を見付けることができ、自然の様子や四季の変化、季節によって生活の様子が変わることや気付くとともに、それらを取り入れ自分の生活を楽しくしようとする。

(6) 自然や物を使った遊び

身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動を通して、遊びや遊びに使う物を工夫してつくることができ、その面白さや自然の不思議さに気付くとともに、みんなと楽しみながら遊びを創り出そうとする。

(7) 動植物の飼育・栽培

動物を飼ったり植物を育てたりする活動を通して、それらの育つ場所、変化や成長の様子に関心をもって働きかけることができ、それらは生命をもっていることや成長していることに気付くとともに、生き物への親しみをもち、大切にしようとする。

(8) 生活や出来事の伝え合い

自分たちの生活や地域の出来事を身近な人々と伝え合う活動を通して、相手のことを想像したり伝えたいことや伝え方を選んだりすることができ、身近な人々と関わることのよさや楽しさが分かるとともに、進んで触れ合い交流しようとする。

内容項目例

(9) 自分の成長

自分自身の生活や成長を振り返る活動を通して、自分のことや支えてくれた人々について考えることができ、自分が大きくなったこと、自分でできるようになったこと、役割が増えたことなどが分かるとともに、これまでの生活や成長を支えてくれた人々に感謝の気持ちを持ち、これからの成長への願いをもって、意欲的に生活しようとする。

小学校中学年

中学年以降の教育への接続

社会科や理科などの系統的な学習や、横断的・総合的に学ぶ総合的な学習の時間に発展的につながっていくことを意識

小学校低学年

架け橋期の接続

小学校1年生は、自分の好きなことや得意なことが分かってくる時期であり、小学校6年間の学びや生活の基盤をつくる重要な時期。幼児教育との円滑な接続により、小学校での学びや生活を充実

幼児教育

国語

算数

社会科

【見方・考え方（案）】

社会的事象やその言説を、地域の空間的な広がり、時期や時間の経過、事象や人々の相互関係などに着目して捉え、よりよい社会の形成に向けて課題を多角的に考え、根拠に基づき公正に判断すること

総合的な学習の時間

【見方・考え方（案）】

実社会・実生活との関わりの中で見いだす興味・関心や問題意識に基づく課題を、横断的・総合的な視点から捉え、新たな価値を創造し、自分らしい生き方を問い続けること

理科

【見方・考え方（案）】

自然や社会の事象・言説を、自然科学的な視点から捉え、観察・実験の結果や科学的知見などに基づいて、客観的、論理的、批判的に考察すること

生活科

【見方・考え方（案）】身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、よりよい生活に向けて思いや願いを実現しようとする

柱書（案）

自立し生活を豊かにしていくための資質・能力について、身体性を伴う体験や多様な表現活動を通して、次のとおり育成することを目指す。

知識及び技能の基礎

活動や体験の過程において、自分自身や身近な人々、社会及び自然の特徴やよさに気付くとともに、他者との関わりを通してこれらの気付きを深め、生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。

思考力、判断力、表現力等の基礎

身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、気付きや実感を基に自分自身や自分の生活について考えを巡らせ、多様に表現することができるようにする。

学びに向かう力、人間性等

身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、他者と協働し、状況に応じて関わり方を調整するとともに、意欲や自信をもって、学びや生活を豊かにしようとする態度を養う。

スタートカリキュラムを通じて、各教科等の特質に応じた学びにつなぐ

知識及び技能の基礎

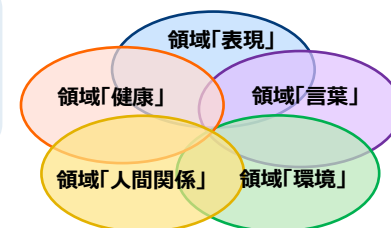
（遊びや生活の中で、豊かな体験を通じて、何を感じたり、何に気付いたり、何が分かったり、何ができるようになったりするのか）

思考力、判断力、表現力等の基礎

（遊びや生活の中で、気付いたことやできるようになったことなどを使い、どう考えたり試したり、工夫したり表現したりするか）

学びに向かう力、人間性等

（心情、意欲、態度が育つ中で、いかによりよい生活を営むか）



外国語活動

特別活動

道徳

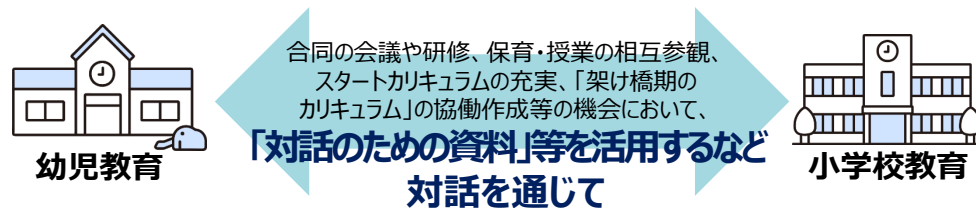
体育

図画工作

音楽

幼児教育と小学校教育との円滑な接続のイメージ

- 幼児教育と小学校教育との円滑な接続を図るに当たっては、それぞれの専門性を発揮した教育の互恵的な充実を図る観点から、互いの教育への共通理解を図るとともに、幼児教育と小学校教育との学びのつながりを意識した実践の改善を図ることが重要。
- 設置者や施設類型に関わらず、幼児教育施設（幼稚園、保育所、認定こども園）及び小学校や地域の実情に応じ、対話を通じて、
 - ① 互いの教育に対する共通理解を図り、
 - ② 小学校1年生が幼児教育施設でどのような生活や学びをしていたのかを踏まえつつ、スタートカリキュラムを充実し、
 - ③ さらに、「架け橋期のカリキュラム」を協働して作成等する過程を通じて、学びのつながりを意識した実践の改善を図る。



互いの教育に対する共通理解

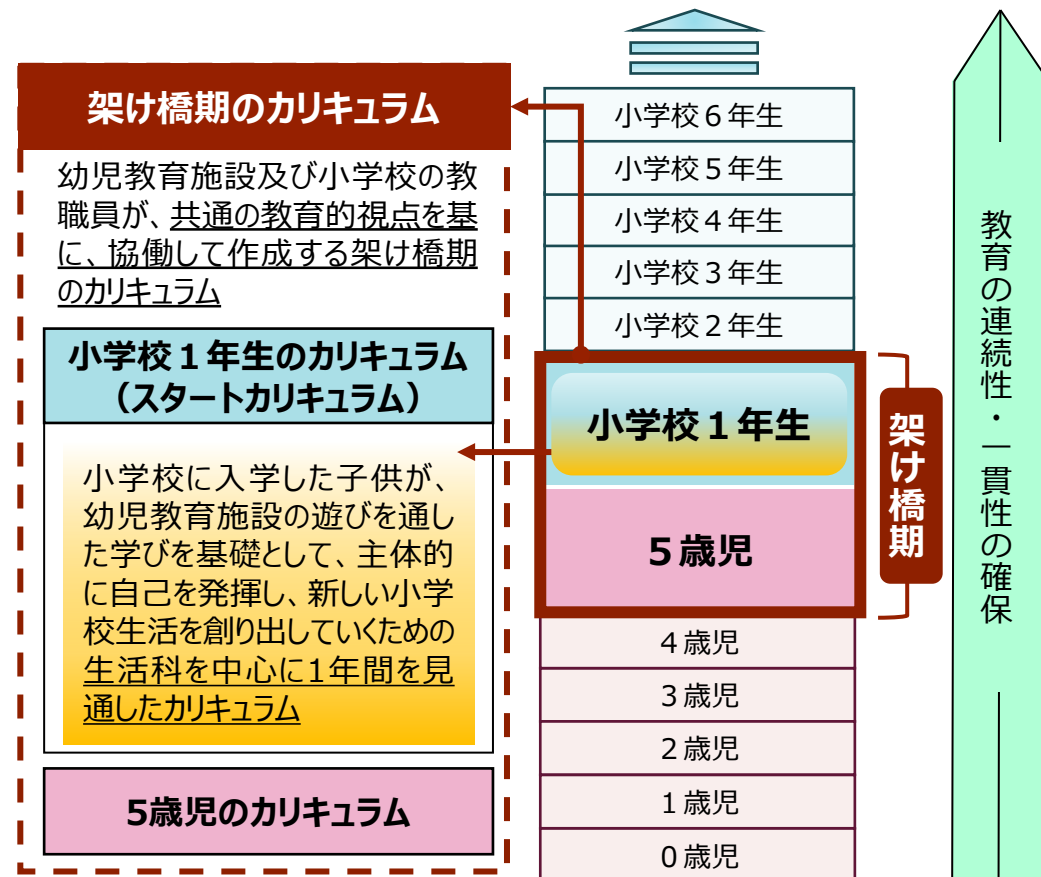
- 【幼→小】幼児教育の基本的な考え方（環境を通じた教育、遊びを通じた総合的な指導）、「遊びの深まり」の実現による資質・能力の育成
- 【小→幼】各教科等の見方・考え方、各教科等における体系的な指導
- 【幼↔小】主体的・対話的で深い学びの実現に向けた取組の改善



学びのつながりを意識した実践の改善

- 【幼】幼児の姿から、遊びの中の「学び」を見取り、幼児教育において育まれる資質・能力について小学校と共有し、「学びのつながり」を検討
 ➡ 小学校の各教科等における資質・能力の育成を見通し、幼児教育において遊びを通じた指導をどのように工夫するとよいかを踏まえた実践の改善
- 【小】小学校の各教科等において育成を目指す資質・能力について、幼児教育施設と共有し、「学びのつながり」を検討
 ➡ 幼児教育において育まれる資質・能力を小学校の各教科等の学習にどう生かすかを踏まえた実践の改善

それぞれの専門性を発揮した教育の互恵的な充実



※「幼児教育」：0歳～小学校就学前までの幼稚園、保育所、認定こども園における教育。
 「幼」は幼児教育の略称として使用。

スタートカリキュラムの充実

- スタートカリキュラムの編成・実施に当たっては、子供一人一人が安心して自己を発揮しながら、新しい小学校生活を創り出していくとともに、幼児期の学びの芽生えから自覚的な学びへと接続していく取組を充実（さらに、これらの学びは中学年以降の探究的な学びに繋げることに留意）。
- これらの取組が円滑に進められるようにするため、スタートカリキュラムを拡張することで、第1学年の教育課程を充実する。そのため、スタートカリキュラムを入学当初の時期だけでなく、1学期中、各学期始めなど1年間を見通して実施できるよう改善を図る（実施に当たっては、架け橋プログラムの実践も参考にして検討）。

スタカリのタイプ

A：2週間

B：4月中

C：4月～7月に拡張

D：年間に分散

4月	5月	6月	7月	8月・9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
スタカリ										
スタカリ										
スタカリ										
スタカリ				スタカリ				スタカリ		

一年間を見通して実施

(イメージ例)

※あくまでも一つの例示として示している。

一人一人が安心感を持ち、新しい人間関係を築くなどの活動を中心とした学習

※10～15分という短い時間を活用して、生活・特別活動・国語・音楽等に関わる活動を行うことを想定

生活科を中心とした学習

※生活科を中心としながら、国語・図画工作・体育・算数等を総合的・関連的に組み合わせて単元を編成した活動を想定

その他の教科を中心とした学習

※黄色ハイライト部分は、各教科等の略称。（国語、算数、生活、音楽、図画工作、体育、道徳、特別活動）

4月2週目のねらい「先生や友達と仲良くなる」～4月末

	月	火	水	木	金
朝	なかよくなろう ・手遊び ・お話読んで ・お話聞いて ・歌って踊ろう	なかよくなろう ・手遊び ・お話読んで ・お話聞いて ・歌って踊ろう	なかよくなろう ・お話読んで ・お話聞いて ・歌って踊ろう	なかよくなろう ・お話読んで ・お話聞いて ・歌って踊ろう	なかよくなろう ・お話読んで ・お話聞いて ・歌って踊ろう
1			がっこうだいすき 国・図・生	がっこうだいすき 国・体・生	がっこうたんけん 国・算・生
2	がっこうだいすき 国・図・生	がっこうだいすき 国・図・生			
3					はるですよ道
4	あいうえお国 きゅうしよく特	あいうえお国 くらよう算	あいうえお国 はるのがっこう図	ゆうぐあそび体 いくつか算	おはなしよんで国 うたおう音
5	あしたもたのしみ ・帰りの支度 ・お話聞いて ・お話読んで	あしたもたのしみ ・帰りの支度 ・お話聞いて ・お話読んで	あしたもたのしみ ・帰りの支度 ・お話聞いて ・お話読んで	あいうえお国 あしたもたのしみ ・帰りの支度 ・お話聞いて ・お話読んで	
帰					あしたもたのしみ ・帰りの支度 ・お話聞いて

5月

	月	火	水	木	金
朝					
1					
2					
3					
4					
5					
帰					

6月

	月	火	水	木	金
朝					
1					
2					
3					
4					
5					
帰					

合科的・関連的な指導や弾力的な時間割作成の考え方

- 合科的・関連的な指導の工夫や弾力的な時間割を作成するに当たっての視点として、①学び・発達の連続性、②時間割の工夫、③教科等間のつながり、④環境づくり、⑤資質・能力の育成、の5つの観点で考える。

(1) 単元の構成と配列

- 主体的に自己を発揮しながら、より自覚的に学びに向かうことが可能となるよう、生活科を中心とした合科的・関連的な指導の工夫を行う
- そのために、第1学年の全ての単元を配列し、俯瞰することができるよう単元配列表を作成する

第1学年 単元配列表 (例)

各教科等	第1週	第2週	第3週	第4週	第5週
国語	あいうえおであそぼう				
	いちねんせい	よろしくね	はるのあさ	みつたえ	ことばのひみつ
算数	なかまづくりとかず	くらべよう	10までのかず	なんばんめ	いくつといくつ
生活	がっこうだいすき みんななかよし				
音楽	みんなであうたう		おんがくにあわせて		
図画工作	好きなものいろいろ	じぶんマーク	こんなことあったよ	ねんどであそぼう	すなやつちであそぼう
体育	からだほぐし	ゆうぐあそび		おにあそび	
道徳	げんきにあいさつ	みんなであそぶもの	ともだちとなかよく	いきものとなかよし	
特別活動	入学式	1年生を迎える会		おしごとたのしいな	

①学び・発達の連続性

発達の特性や学びを踏まえて指導計画を立てるとともに、子供一人一人の児童理解を基にして学習活動を設定したり関わったりする

②時間割の工夫

一日の流れと活動量を意識し、落ち着いて生活できるようにしたり、朝の会や帰りの会の時間の設定を工夫したりする

③教科等間のつながり

日常生活や生活科の活動の中にある発見や驚き、問いなどを生かし、教科の学びにつなげる

④環境づくり

子供一人一人が安心して自己を発揮できるような教室・廊下・学校全体の環境とする

⑤資質・能力の育成

思いや願いをもって、体験と表現を往還しながら自覚的に学べるようにする

(2) 週の計画と時間配分

- 児童の発達の特性や学びの特徴を踏まえ、短い時間で時間割を構成したり、ゆったりとした活動時間を位置付けたりするなど、弾力的な時間割の設定の工夫を行う
- そのために、実践に向けて具体化・可視化した週案を作成する

スタートカリキュラム第2週の週案 (例)

	第6日	第7日	第8日	第9日	第10日
日	4/〇(月)	4/〇(火)	4/〇(水)	4/〇(木)	4/〇(金)
朝	「なかよくなろう」※ ・手遊び ・お話を聞いて ・歌って踊ろう	「なかよくなろう」※ ・手遊び ・お話を聞いて ・歌って踊ろう	「なかよくなろう」※ ・手遊び ・お話を聞いて ・歌って踊ろう	「なかよくなろう」※ ・手遊び ・お話を聞いて ・本が大好き	「なかよくなろう」※ ・手遊び ・お話を聞いて ・本が大好き
ポイント1	「がっこうだいすき みんななかよし」 ・自己紹介をしよう ・国語の「は」を ・学校の「は」を ・びっくりを見付けよう (国1/3)	「あいうえおであそぼう」 ・ひらがな (国2/3)	「あいうえおであそぼう」 ・ひらがな (国2/3)	「がっこうだいすきな かよいっぱい」 ・道具で遊ぼう (体「ゆうぐあそび」1)	「あいうえおであそぼう」 ・ひらがな (国2/3)
ポイント2	「生活科を中心とした学習活動」 ・「はるのあさ」 ・「10までのかず」 ・数えてみよう (算1)	「くらべよう」 ・数を比べよう (算2/3)	「はるのあさ」 ・リズムに合わせて歌おう (国1/3)	「見つけたものを数えてみよう」 (算「10までのかず」1)	「はるのあさ」 ・数を数えよう (算1)
ポイント3	「教科等を中心とした学習活動」 ・「なかよしだいさくせん」 ・みんなでおもしろく ・給食を食べよう (食1/3)	「なかよしだいさくせん」 ・みんなでおもしろく ・給食を食べよう (食2/3)	「はるのあさ」 ・みんなが生き生き (国1/3)	「はるのあさ」 ・工夫して読もう (国1/3)	「からだほぐし」 ・二人、三人、みんなで遊ぼう (体1)
ポイント4	「くらべよう」 ・数を比べよう (算2/3)	「はるのあさ」 ・「春のTシャツ」を作ろう (国「はるのあさ」1)	「はるのあさ」 ・「春のTシャツ」を作ろう (国「はるのあさ」1)	「みんなであうたう」 ・わらべうたで遊ぼう (音1)	

※の時間については、授業時数以外の教育活動として位置付けたり、各教科等で実施したりすることが考えられる。(各教科等で実施する場合には、学習活動がその教科等の目標や内容を実現するものである必要がある。)

一人一人が安心感を持ち、新しい人間関係を築くなどの活動を中心とした学習

合科的・関連的な指導による生活科を中心とした学習

教科等を中心とした学習

(P.19補足イメージ⑥参照)

動物園との連携

旭川市立高台小学校 旭川市旭山動物園

1 モルモットを飼いたいな

- ・モルモットとの触れ合い、飼いたいと願う

2 モルモットを飼育しよう

- ・モルモットを飼育する中で、気付いたことを伝え合ったり、飼育を工夫したりする

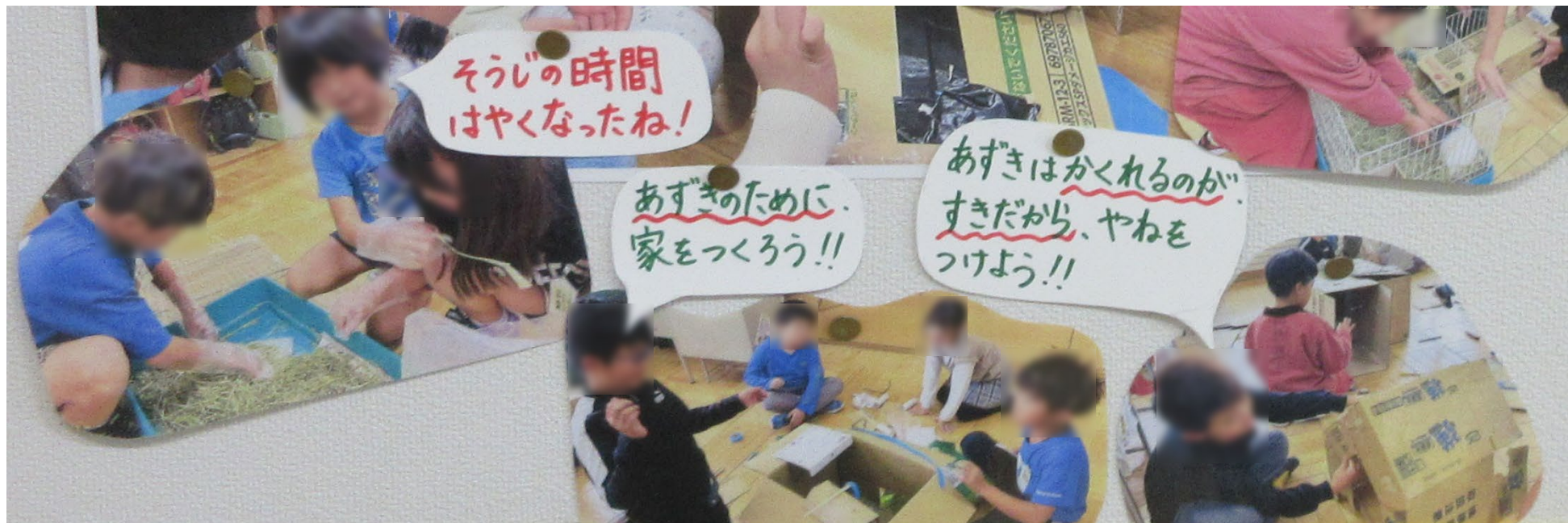
3 モルモットを1年生に紹介しよう

- ・飼育を振り返るとともに、1年生に紹介する
- ・モルモットとのお別れ会をする

- ・旭山動物園の貸出し事業を利用して、モルモットを教室で25日間飼育する。
- ・よりよい飼育活動となるように、動物園の飼育員と連携し、モルモットの特性や適切な飼育環境などに配慮する。
- ・飼育活動を通して、生きものへの親しみをもち、大切にしようとする。



貸出期間が終わっても、動物園でモルモットに会える



掃除が上手にできるようになった自分に気付く

モルモットの特性に気付き、よりよい飼育環境をつくる

獣医師会との連携

福井県内の小学校（公社）福井県獣医師会

- 2002年度から学校で動物を飼育することへの支援事業を実施している。
- 2012年度からモルモット生体、飼育ケージ、飼料、治療等が無償で提供支援し累積モデル校数は46校となる。
- 2026年度から福井市足羽山公園遊園地と連携して、動物園で展示しているモルモットを学校に貸与する。飼育期間終了後に児童が動物園で再会できる体制とする（R8、9には県内小学校15校が飼育予定）。
- 各学校においてモルモットを飼育できるように、獣医師が出前講座、教師との飼育相談、モルモットの健康診断、体調不良時の治療などを行うとともに、亡くなった時のケアを含む命の授業を実施している。
- 飼育期間は小学校の希望により1ヶ月～10ヶ月(年度末)としている。
- 土日及び長期休暇の飼育管理は児童・保護者が自宅に持ち帰りモルモットを飼育するホームステイとしている。

☆福井県獣医師会ブログ『獣医さんが応援する学校の動物』での活動等の掲載☆

公益社団法人
福井県獣医師会
Fukui Veterinary Medical Association

HOME > 事業案内 > 学校飼育動物事業（今年は、足羽山公園遊園地のモルモットが教室に来てくれます。）

学校飼育動物事業（今年は、足羽山公園遊園地のモルモットが教室に来てくれます。）

近年、様々な胸痛む事件が報道されるたびに、生命尊重を育む心の教育の大切さが叫ばれていますが、こうした教育の一つとして、幼児期から小学校の時期に動物飼育の体験を子どもたちに持たせることが重要であると言われています。

動物と触れ合うことで、子どもたちが心安らぐ時間を持つことができ、動物の世話をすることで責任が生まれ、そうした経験は、彼らの中に他者を思いやる気持ち、命の尊さ、共感する心が育つための助けとなると確信しております。

福井県獣医師会ホームページで飼育支援事業の紹介



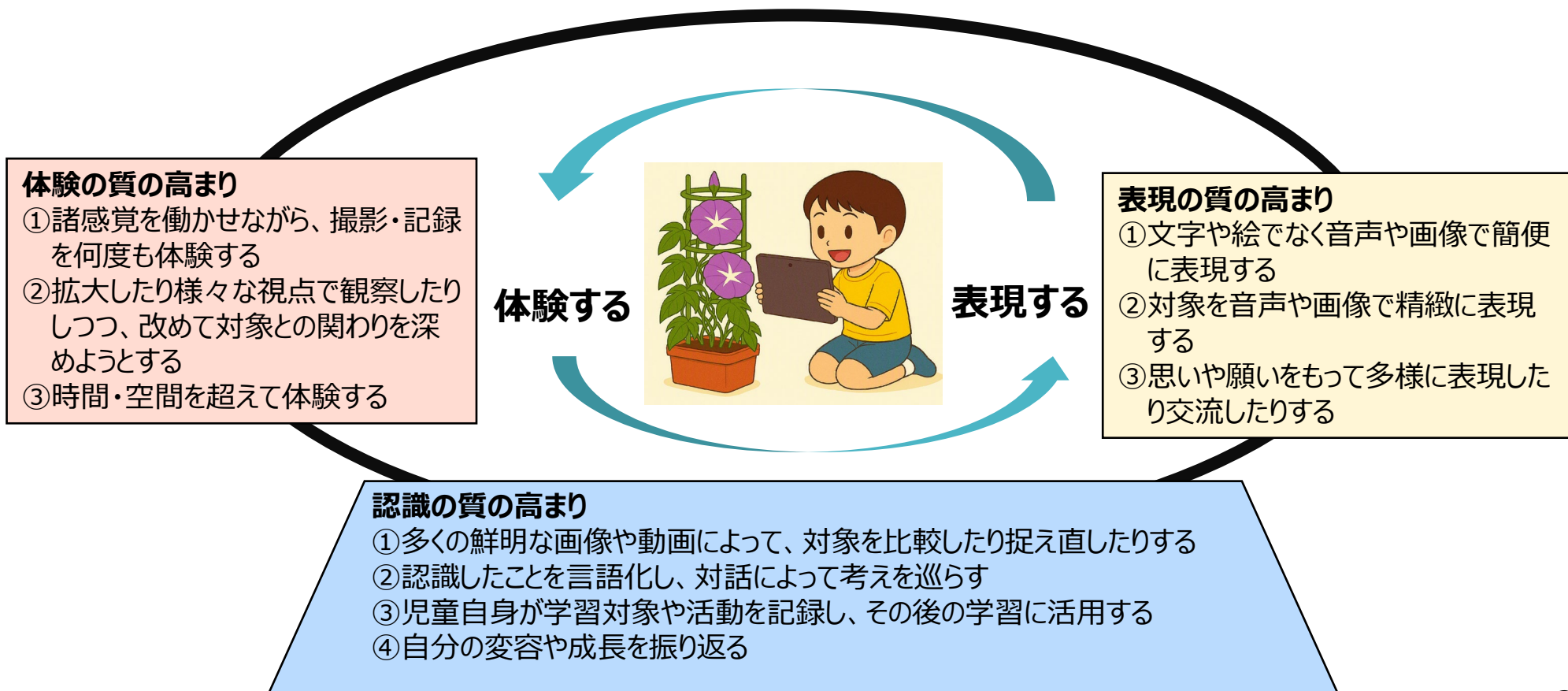
獣医師がモルモットの特徴などについて説明し、子供の問いに共感したり、答えたりする



モルモットをじっくり見たり、触ったり、抱っこしたりするなどして、温かさや命の鼓動を感じる

生活科におけるICT活用のイメージ

- 生活科におけるICT活用は、身体性を伴う体験をより一層豊かにしていくためであり、直接体験を代替するものではない。
 このことを前提とした上で、ICT活用を、生活科の本質的意義をより深化させ、体験・認識・表現の質を高めるための補助・促進する手段と位置付ける。その結果として、
 - (1) 繰り返し関わったり視点を変えたりすることにより、体験の質が高まる（関わりを広げ深める体験）
 - (2) 画像や動画により対象を比較したり、捉え直したりすることにより、認識の質が高まる（気付きの質の高まり）
 - (3) 多様な方法で記録・交流することにより、表現の質が高まる（思いや願いに即した豊かな表現）
 ことへとつながっていく。



ICT活用における幼児教育・総合的な学習の時間との接続

- 幼児教育段階におけるICT活用は、乳幼児期は直接的・具体的な体験が重要であることを踏まえ、主に、記録をして繰り返し見たり、詳しく調べたり、表現の幅を広げたり、その場にはいない人とコミュニケーションをとったりするなど、遊びの中で取り入れている。
- 総合的な学習の時間におけるデジタル学習基盤の活用は、探究のプロセスを支える基盤として位置付けられている。
- このようなことを踏まえつつ、生活科におけるICT活用については、生活科の本質的意義（身体性・関わり・自己認識）を支え、幼児教育から総合的な学習の時間へと連なる学習の質の高まりを促進する学習基盤として位置付ける。

幼児教育段階におけるICT活用

- ・記録する
- ・詳しく知る
- ・表現する
- ・やり取りする

生活科におけるICT活用

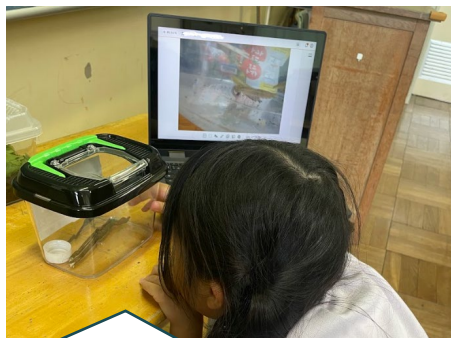
- ・撮影・記録
- ・比較・捉え直し・言語化
- ・表現・交流

総合的な学習の時間におけるICT活用

- ・課題の設定
- ・情報の収集
- ・整理・分析
- ・まとめ・表現

体験の質の高まり

生き物を飼育する中でじっくり見続けることで、「しっぽがだんだん短くなってきた」「足が生えている」と新たに発見する。



- ・写真と実物を見比べて、違いや変化に驚く
- ・ヤゴの羽化の様子を低速度撮影して不思議さを感じる

認識の質の高まり

自分が書いた観察カードを手掛かりにして、「上手に世話ができるようになった」と世話を重ねてきたことや、自分の成長に気付く。



- ・デジタル観察カードを活用して振り返ることで、生き物と自分との関わりや自分の変容や成長に気付く

表現の質の高まり

自分で実際に世話をしたり発見したからこそ、「友達に見せたい、伝えたい」と思いや願いが高まり、表現したり交流したりする。



- ・デジタル観察カードを見ながら、伝えたい思いや願いを高める
- ・動画で感動場面を記録し、共感し合う

- 生活科は教科として位置付けられているとともに、その学びは、社会科及び理科の土台となる性質を有していることに加え、3つの資質・能力についてそれぞれの観点で評価することでより分析的に適切に見取ることができることから、観点別評価を行うことが適当。
- その際、児童一人一人の発達や学びの過程を捉え、そのよさや成長を見取することを基本とし、幼児教育、中学年以降の教科、総合的な学習の時間の学びとの継続性を踏まえた評価が求められる。

社会科

総合的な学習の時間

理科

【社会科・理科における評価の特徴】
単元目標に照らして、その実現状況を観点ごとに評価し、評定

【総合的な学習の時間における評価の特徴】
各学校が評価の観点を設定し、児童のよさや成長の様子などを文章で記述

生活科

学びに向かう力、人間性等

・身近な人々や、社会及び自然に自ら関わり、他者と一緒に活動したり、状況に応じて働きかけたりして、生活をよりよくしていこうとする意欲や態度を育成する。

身体性を伴う体験、
言葉・絵・動作などの
多様な表現

思考力、判断力、表現力等の基礎

・自分との関わりで対象を捉える
・考え、試し、工夫し、表現する

知識及び技能の基礎
・身近な人々・社会・自然、
自分自身への気づき
・生活上必要な習慣や技能

【生活科における評価の特徴】

- ・ 社会科や理科につながる教科としての認識の側面（身の回りに様々な場所があり多様な人々が生活していることが分かる、動植物の特徴、変化や成長の様子に気付くなど）を重視
- ・ 一方、活動や体験そのもの、すなわち個別の学習過程においては思考・判断・表現を重視
- ・ 学びに向かう力、人間性等については、1単位時間だけでなく、長期にわたる変容も評価の対象となり、一人一人の多様な学びを評価
- ・ 一人一人の児童の多様な学習活動を評価するために、評価規準を具体的かつ明確に設定するとともに、具体的な子供の姿を描くことを通して形成的評価を実施

幼児教育

知識及び技能の基礎

（遊びや生活の中で、豊かな体験を通して、何を気づき、何に気付いたか、何が分かったか、何が出来るようになったのか）

思考力、判断力、表現力等の基礎

（遊びや生活の中で、気付いたことや、できるよさや方法を伝え、考えたり、試し、工夫したり、表現したりする）

学びに向かう力、人間性等

（心情、意欲、態度の中で、いかによい生活を営むか）

遊びを通して資質・能力を一体的に育成

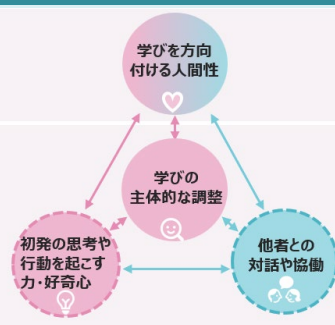
【幼児理解に基づいた評価の特徴】

- ・ 評価の実施に当たっては、指導の過程を振り返りながら幼児の理解を進め、幼児一人一人のよさや可能性などを把握するとともに、教師の指導が適切であったかどうかを把握し、指導の改善に生かすようにすることが重要
- ・ 評価は、他の幼児との比較や一定の基準に対する達成度についての評定によって捉えるものではないことに留意
- ・ 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、幼児一人一人が到達すべき目標ではないが、教師が指導を行う際に考慮
- ・ これにより、幼児が発達していく方向を意識して、それぞれの時期にふさわしい指導を積み重ねていくことに留意

生活科における「学びに向かう力、人間性等」の育成に繋がる学習評価のプロセス

- 生活科の単元では、各内容に示された「学びに向かう力、人間性等」の記載事項を参考にして、単元の目標が設定されることから、その資質・能力が育成されることが重視される。そのために、学習過程の中に、単元の目標で示された「学びに向かう力、人間性等」が育成されるように学習活動を組み立てる（学習過程のデザイン）ことがポイントとなる。
- 単元ごとの「学びに向かう力、人間性等」の育成を重視するとともに、「見取る姿（仮称）」の継続的な発揮を見取り、形成的評価を充実させることについて今後も検討を重ねる。

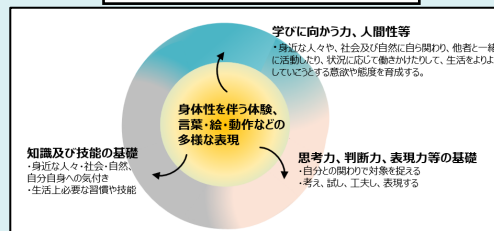
「学びに向かう力、人間性等」の要素



「学びに向かう力、人間性等」の目標

生活科

身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、他者と協働し、状況に応じて関わり方を調整するとともに、意欲や自信をもって、学びや生活を豊かにしようとする態度を養う。



内容ごとの「学びに向かう力、人間性等」

(1)	楽しく安心して遊びや生活をしたり、安全な登下校をしたりしようとする
(2)	自分の役割を積極的に果たしたり、規則正しく健康に気を付けて生活したりしようとする
(3)	それらに親しみや愛着をもち、適切に接したり安全に生活したりしようとする
(4)	それらを大切に、安全に気を付けて正しく利用しようとする
(5)	それらを取り入れ自分の生活を楽しくしようとする
(6)	みんなと楽しみながら遊びを創り出そうとする
(7)	生き物への親しみをもち、大切にしようとする
(8)	進んで触れ合い交流しようとする
(9)	これまでの生活や成長を支えてくれた人々に感謝の気持ちを持ち、これからの成長への願いをもって、意欲的に生活しようとする

「見取る姿（仮称）」

- ・思いや願いをもった働きかけ
身近な人々、社会及び自然に自ら関わろうとするとともに、思いや願いをもって働きかけようとしている。
- ・他者との伝え合いや協働
互いに力を合わせたり伝え合ったりして、他者とともによりよい生活に向けて活動しようとしている。
- ・試行錯誤や自己調整
場面や状況に応じて、繰り返し対象に関わり、前向きに行動しようとしている。

単元ごとに異なり、単元の中で見取る

単元Aの目標 ※内容（２）
家族がにこにこになるための活動を通して、家族のことや自分であることを考え、家族の大切さや自分が家族によって支えられていることが分るとともに、**自分の役割を積極的に果たし、規則正しく健康に気を付けて生活することができるようにする。**

単元Bの目標 ※内容（８）
家族がにこにこになるための活動を伝え合うことを通して、家族のことを想像し伝えたいことや伝え方を考え、家族と交流することのよさや楽しさが分るとともに、**進んで家族と触れ合うことができるようにする。**

単元Cの目標 ※内容（９）
書きためてきた「思い出カード」をもとに「思い出すごろく」をつくって遊ぶ活動を通して、過去と現在の自分を比較し、自分自身が成長していることや様々な人が自分の成長を支えてくれていることに気付くとともに、**これからの期待をもつて意欲的に生活できるようにする。**

総合所見欄等に反映
多様な子供一人一人のよさや成長を肯定的に評価できるように個人内評価とする

全単元に共通し、継続的な発揮を見取る

思いや願いをもった働きかけ／他者との伝え合いや協働／試行錯誤や自己調整

「思・判・表」の観点別評価に「○」を付記
「見取る姿（仮称）」に示す「継続的な発揮」を見取る

※生活科の「見取る姿（仮称）」は、内容ごとの「学びに向かう力、人間性等」と関係付けながら、参照・活用していく

「高次の資質・能力」等を活かした単元計画づくりの参考イメージ（小学校・生活科）



次の単元は、年間指導計画では単元名「生きもの大好き」となっています。ここでは、生き物を飼育することが示されています。これは、生活科の内容（７）「動植物の飼育栽培」を踏まえた単元です。子供が今までの経験を生かしながら、思いや願いを実現する過程の中で資質・能力を育成していくことができるのかを考えて単元計画を作成したいです。

まず、学習指導要領の記述を確認してみよう。

デジタル学習指導要領（イメージ）

目標 自立し生活を豊かにしていくための資質・能力について、身体性を伴う体験や多様な表現活動を通して、次のとおり育成することを目指す

見方・考え方 身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、よりよい生活に向けて思いや願いを実現しようとする

高次の資質・能力

（身近な人々、社会及び自然と関わる活動に関する内容）
身近な人々、社会及び自然への働きかけの中で、自分の生活がよりよくなることへの気づきを深め、生活を楽しくすることができる

内容 内容（７）「動植物の飼育・栽培」
動物を飼ったり植物を育てたりする活動を通して、それらの育つ場所、変化や成長の様子に関心をもって働きかけることができ、それらは生命をもっていることや成長していることに気付くとともに、生き物への親しみをもち、大切にしようとする。



児童が最終的に「高次の資質・能力」を身に付けられるような活動を考えればいいのか。「自分の生活がよりよくなることへの気づきを深める」ことが、深い学びの鍵になっていますね。生き物を大切に飼育していることや、そうした自分自身に気付くことが、よりよい生活につながりますね。この単元では、どのような学習活動を設定していくのかを考えていきます。



生活科の学習活動は、児童の思いや願いを実現していくようにしたいな。その上で、資質・能力が身に付くようにしたいな。生活科の単元を作成するために、①発想する段階、②構想する段階、③計画する段階の手順で考えよう。



年間指導計画を踏まえながら、
①発想する段階 児童は生き物を探したり、じっと見たりしているから興味・関心はありそうだ。また、生き物図鑑も見ているので、生き物を飼育する活動につなげたいな。飼育する中で、生き物の変化や成長の様子に気付いてほしいな。そのためには、生き物を飼育して、じっくり観察して、そこで気付いたことを子供が「生き物図鑑」を作って、友達と伝え合ってもらいたいな。

②構想する段階 児童の思いや願い、関心や疑問を生かすことと、生き物を飼育することや「生き物図鑑」を作成することの両方のバランスを考えながら、言葉かけや環境構成などを工夫する必要があります。

③計画する段階 飼育したり、調べたり、伝え合ったりする学習活動を、一連の問題解決の流れと児童の意識の流れに沿った展開にする必要があります。体験活動と表現活動を往還しながら、授業時数、学習環境、学習形態、指導体制、各教科等との関連などを視野に入れながら計画していきます。



本単元における学習活動とそれらのつながりが決まったので、評価計画を立てるか。育成したい資質・能力をきちんと見取れる評価にしたいな。

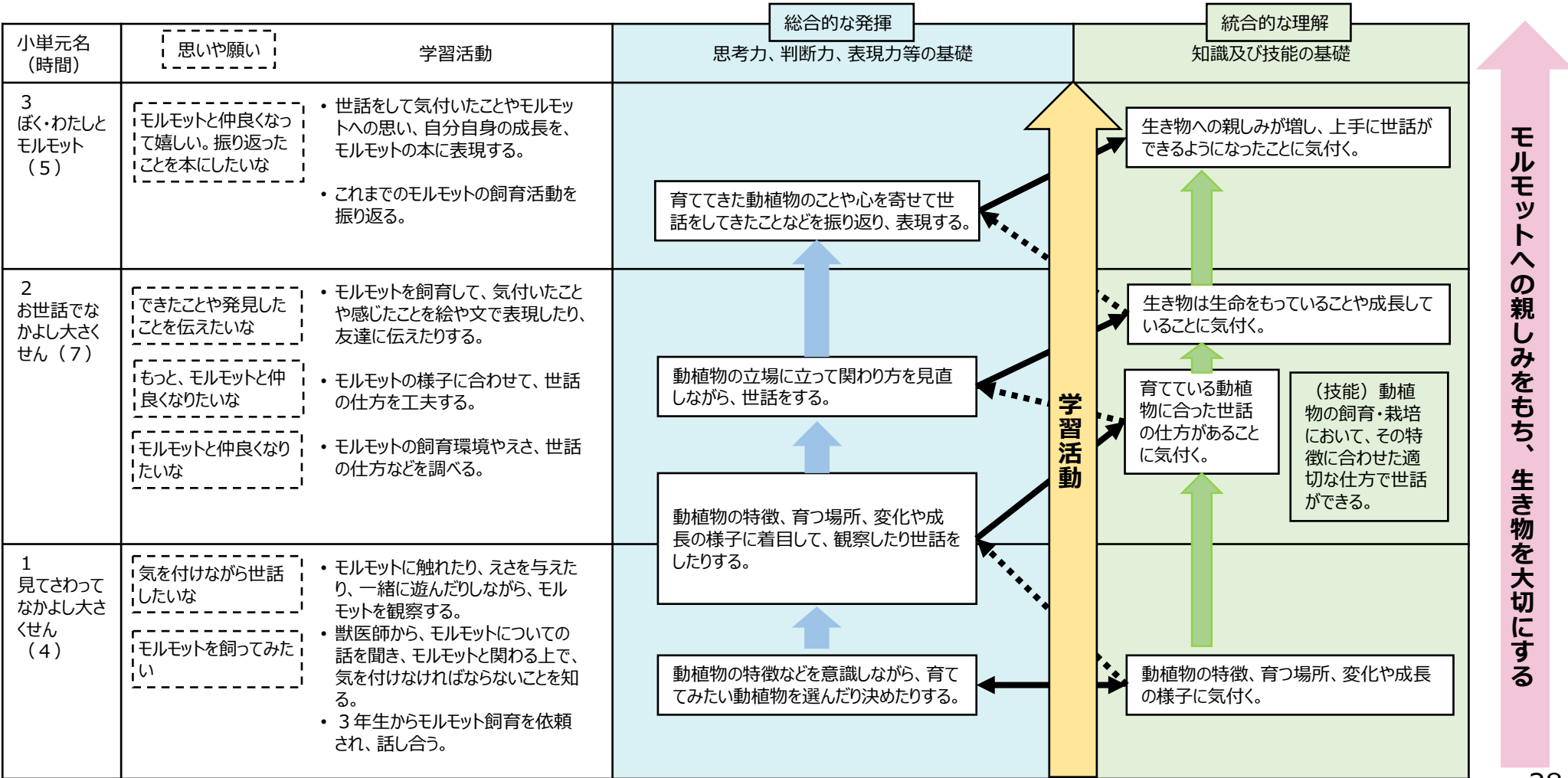


本単元の活動における高次の資質・能力は次のように考えることができます。身近な生き物や友達との触れ合いの中で、生き物の生命や大切に飼育した自分自身に気付くことは、これからの自分の生活を楽しくすることにつながりますね。

高次の資質・能力（身近な人々、社会及び自然と関わる活動に関する内容）
 身近な人々、社会及び自然への働きかけの中で、自分の生活がよりよくなることへの気付きを深め、生活を楽しむことができる。

内容(7) 動植物の飼育・栽培
 動物を飼ったり植物を育てたりする活動を通して、それらの育つ場所、変化や成長の様子に関心をもって働きかけることができ、それらは生命をもっていることや成長していることに気付くとともに、生き物への親しみをもち、大切にしようとする。

単元目標
 モルモットを飼育する活動を通して、モルモットの変化や成長の様子に関心をもって着目したり世話を工夫したりして、モルモットに合った世話の仕方があることや生命をもっていることや成長していることに気付くとともに、モルモットへの親しみをもち、生き物を大切にすることができるようにする。



※生活科の単元づくりは、子供一人一人が思いや願いをもった学習活動の中で考えを巡らせ、気付きを深め、肯定的な心情を育むという「深い学び」となっていくことから、上図の順番で示している。



参考データ集

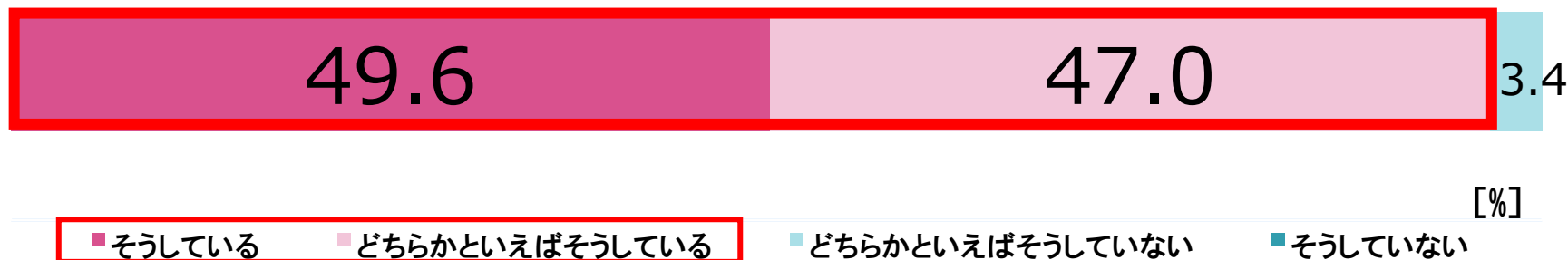
児童の思いや願いを意識した「深い学び」の実施状況



質問項目：

児童が、身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、よりよい生活に向けて思いや願いを実現しようとするように意識して授業を行っている

→「そうしている」「どちらかといえばそうしている」と回答した割合は
9割を超えている



※「そうしていない」と回答した割合は0.0%

「令和4年度小学校学習指導要領実施状況調査」教師オンライン質問調査（国立教育政策研究所）

一方、課題も見られる



- 具体的な活動や体験が深い学びにつながるイメージを持ちにくい
- 児童理解に十分な時間がとれず、児童一人一人の思いや願いを把握しにくい

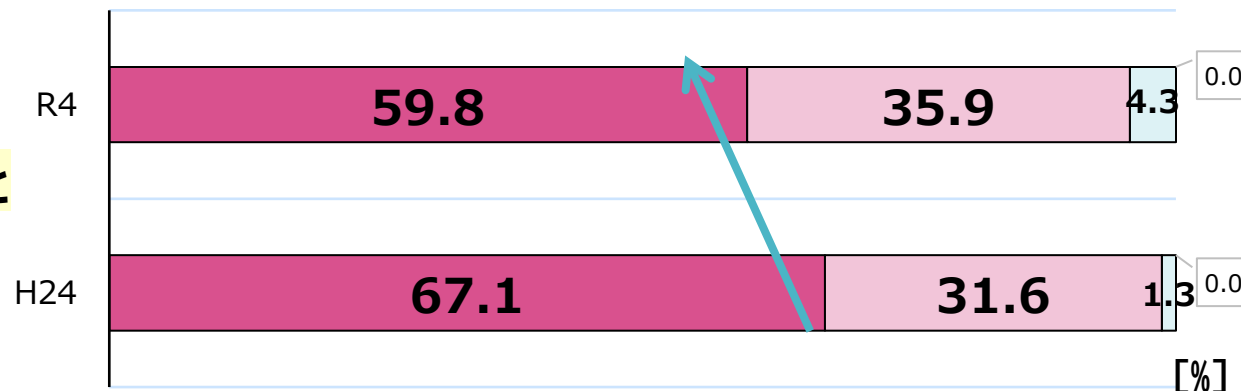
地域の人々、社会及び自然を一体的に扱う学習に課題

地域の人々、社会・自然を扱う学習について、「そうしている」と回答した割合が減少

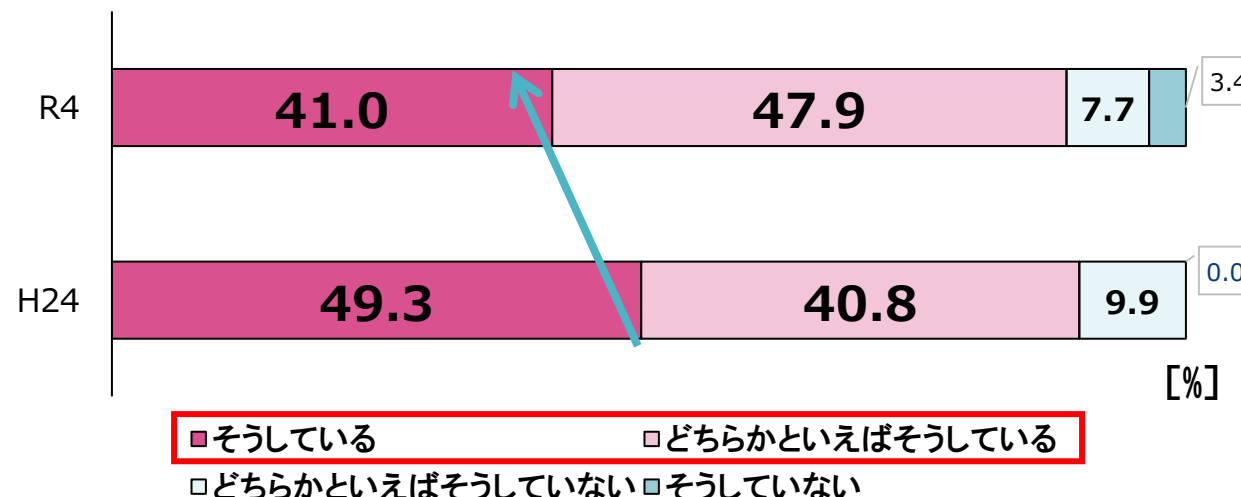


質問項目

- 身近な人々、社会及び自然と直接関わる授業を行っている

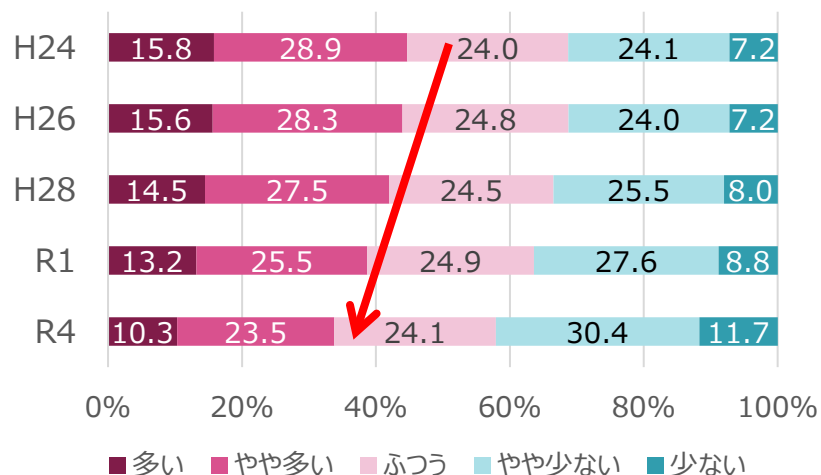


- 動物や植物への関わりが深まるよう継続的な飼育・栽培活動を行っている



自然体験、社会体験の機会が減少

自然体験の経年変化（小4～小6、中2、高2）

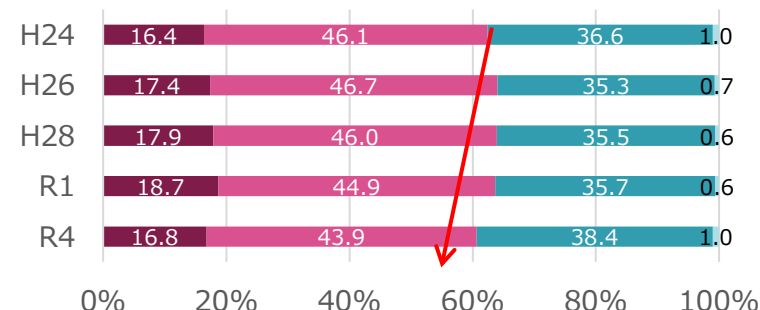


（注）小学生、中学2年生、高校2年生の自然体験を訪ねる9項目に対する回答について、「何度もある」=1点、「少しある」=2点、「ほとんどない」=3点と得点化し、各質問項目の合計を項目数で割った平均点により、以下の5段階に分類。

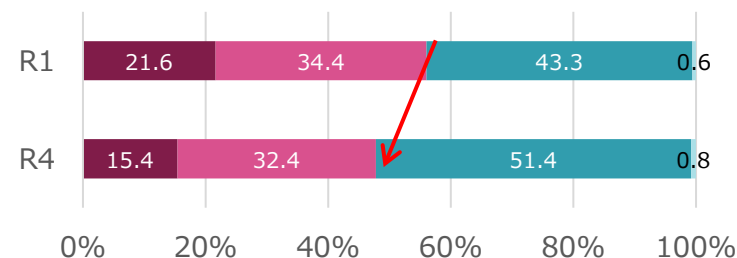
「多い」=1.0点以上1.4点未満/「やや多い」=1.4点以上1.8点未満/「ふつう」=1.8点以上2.2点未満/「やや少ない」=2.2点以上2.6点未満/「少ない」=2.6点以上3.0点未満。この合計得点について、平成24年から令和4年を比較。

【9項目】：①「野鳥を見たり、鳴く声を聞いたこと」②「夜空いっぱい輝く星をゆっくり見たこと」③「海や川で泳いだこと」④「チョウやトンボ、バッタなどの昆虫をつかまえたこと」⑤「太陽が昇るところや沈むところを見たこと」⑥「海や川で貝を採ったり、魚を釣ったりしたこと」⑦「キャンプをしたこと」⑧「大きな木に登ったこと」⑨「ロープウェイやリフトを使わずに高い山に登ったこと」

体の不自由な人、お年寄り、困っている人などの手助けをしたこと（小4～小6、中2、高2）

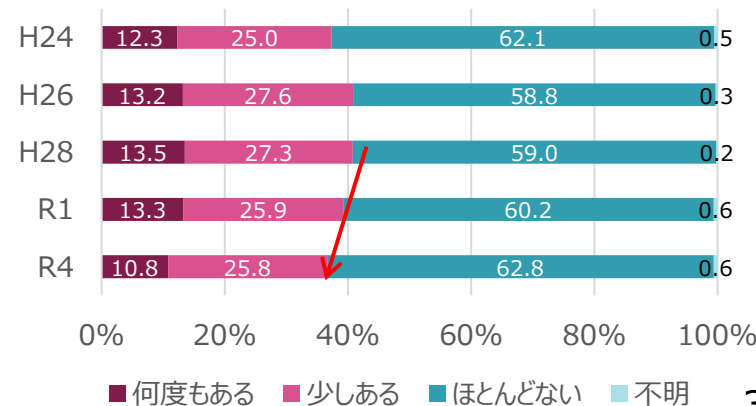


（※）以外のボランティア活動に参加したこと（中2、高2）



（※）「道路や公園などに捨てられているゴミを拾ったりしたこと」、「体の不自由な人、お年寄り、困っている人などの手助けをしたこと」

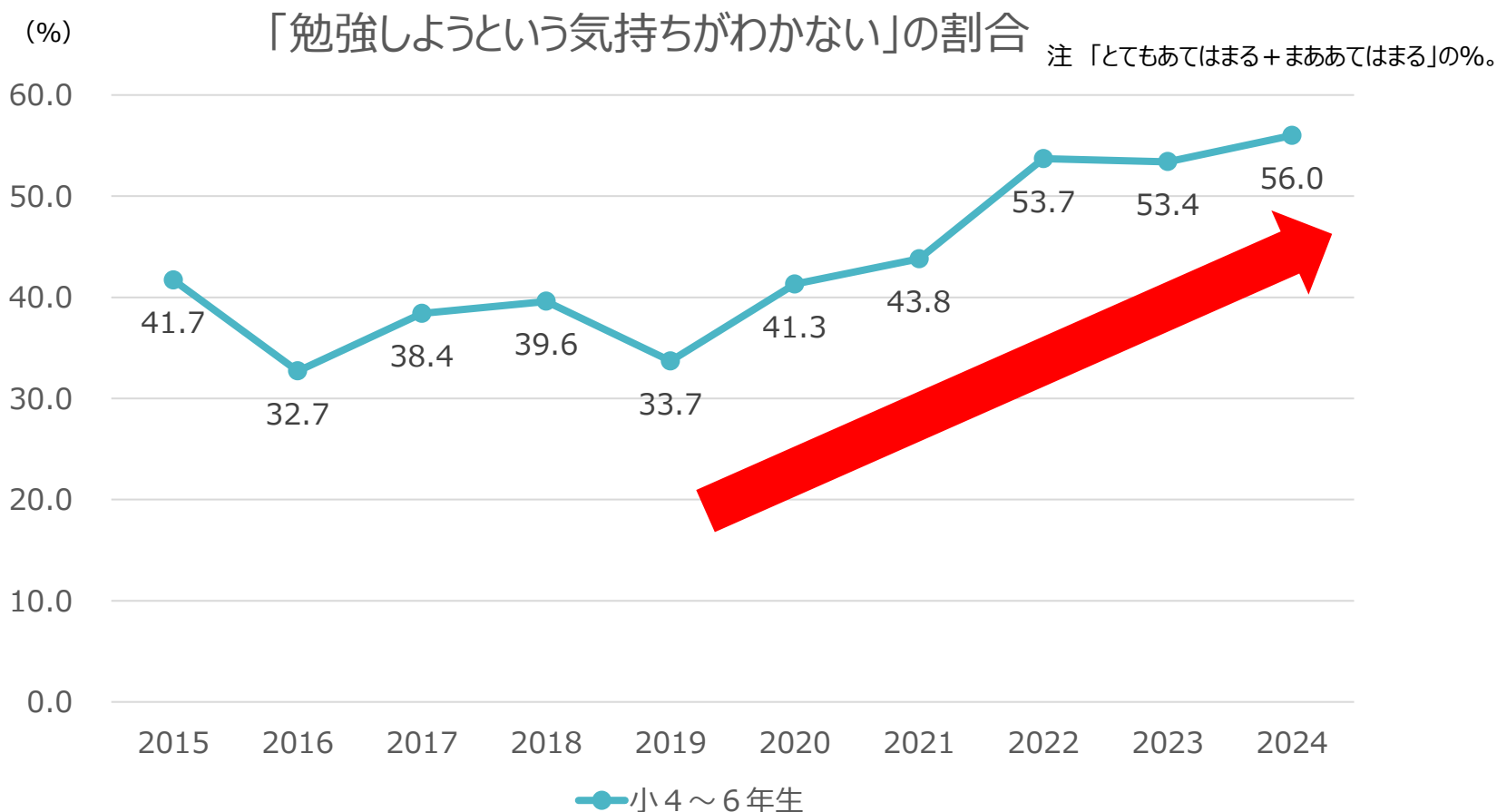
外国の人と交流したり一緒に生活したりしたこと（中2、高2）



児童の学習意欲が低下

小4～6年生の「勉強しようとする気持ちがわからない」割合は**上昇傾向**

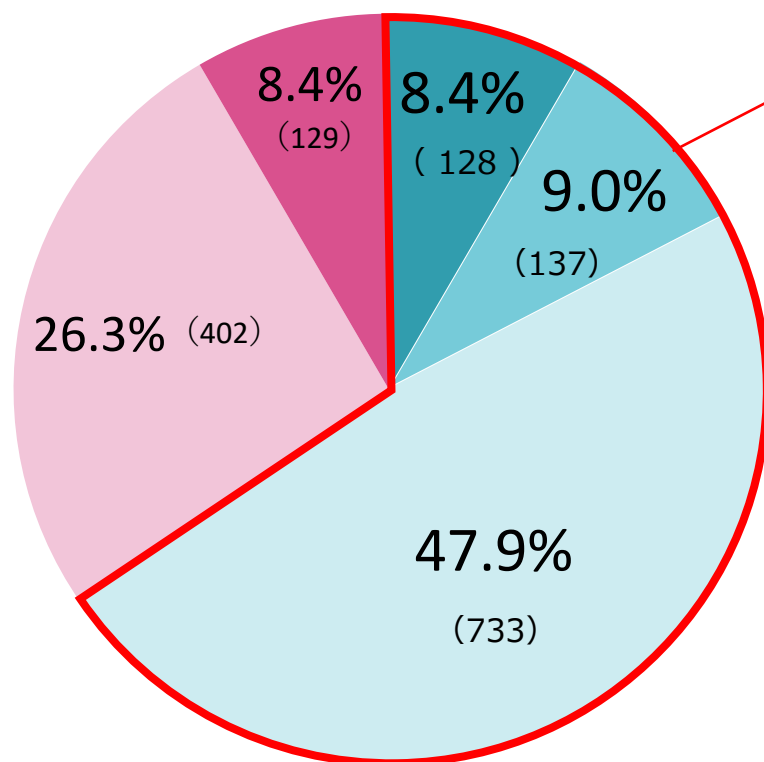
子供回答



幼児教育と小学校教育との接続に課題

約65%の市町村で幼児教育と小学校教育との連携・接続の取組が 不十分

幼保小連携・接続の実施状況



- ステップ0 :
連携の予定・計画がまだ無い
- ステップ1 :
連携・接続に着手したいが、まだ検討中である
- ステップ2 :
年数回の授業、行事、研究会などの交流があるが、接続を見通した教育課程の編成・実施は行われていない
- ステップ3 :
授業、行事、研究会などの交流が充実し、接続を見通した教育課程の編成・実施が行われている
- ステップ4 :
接続を見通して編成・実施された教育課程について、実施結果を踏まえ、更によりよいものとなるよう検討が行われている

※母数：回答があった1,529市町村
(幼稚園・保育所・幼保連携型認定こども園いずれも未設置の市町村を除く)
※グラフ中の()内は市町村数

「令和7年度幼児教育実態調査」(文部科学省初等中等教育局幼児教育課)

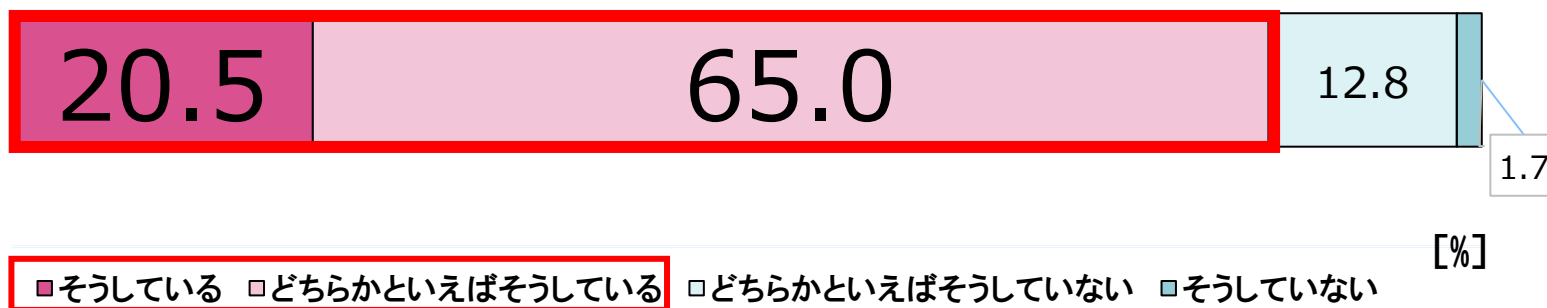
中学年以降との接続の状況



質問項目：

社会科や理科、総合的な学習の時間をはじめとする中学年の各教科等への接続を意識して、指導計画の作成や実際の指導を行っている

→「そうしている」「どちらかといえばそうしている」と回答した割合は**約 9 割**



「令和4年度小学校学習指導要領実施状況調査」教師オンライン質問調査（国立教育政策研究所）

一方、課題も見られる



- 生活科と社会科、理科、総合的な学習の時間などとの違いや関連を理解しつつ、生活科のねらいを実現させていくことについて、具体的なイメージをもちにくい

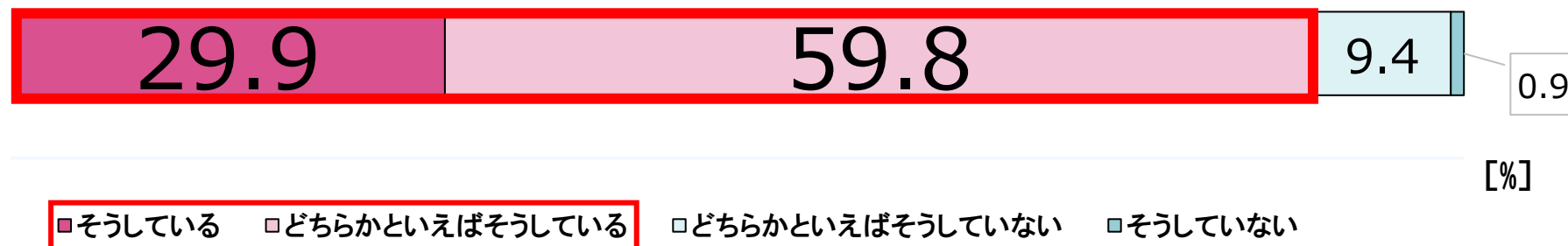
年間を通じた継続的な合科的・関連的な指導に課題



質問項目：

年間を通じて、他教科等との関連を積極的に図った授業を行っている

→「そうしている」「どちらかといえばそうしている」と回答した割合は**約 9 割**



「令和4年度小学校学習指導要領実施状況調査」教師オンライン質問調査（国立教育政策研究所）

一方、課題も見られる



- 低学年の担任経験がない教師が、年間を見通した低学年全体の指導計画を把握する教材研究が不十分
- 教科横断的な視点での教育課程の編成、実践上の工夫が不十分

学校における動物飼育の困難さに課題

教職員の抱える「屋外飼育における困難さ」上位5つ

順位		回答割合
1	長期休業中の世話が大変	28.8%
2	病気やけがの処置が困難	15.6%
3	土日の世話が大変	13.2%
4	児童への感染症やアレルギー	11.7%
5	飼育舎の清掃が大変	9.0%

(有効回答：583件)

全国学校飼育動物研究会 第21回全国研究大会

「小学校における鳥インフルエンザ後の動物飼育状況－全国調査」(大手前大学 中島由佳)の調査結果を基に、文部科学省にて作成。

※2017年7月～2018年10月に、全都道府県を対象に2,082校を無作為抽出し、調査を実施。

※本質問は「屋外での動物飼育」を行っている学校に限定した調査。次の16の選択肢から、「飼育をする上で困ったこと」を3つ以内選択する形式での回答を求めた結果。

<選択肢>

①動物の入手方法がよく分からない ②動物の飼育方法がよく分からない ③エサの確保が難しい ④飼育舎の清掃が大変 ⑤飼育舎の修理が大変・できない

⑥土日の世話が大変 ⑦長期休業中の世話が大変 ⑧糞尿の廃棄方法がよくわからない ⑨病気やけがの処置が難しい ⑩死亡時の処置が難しい

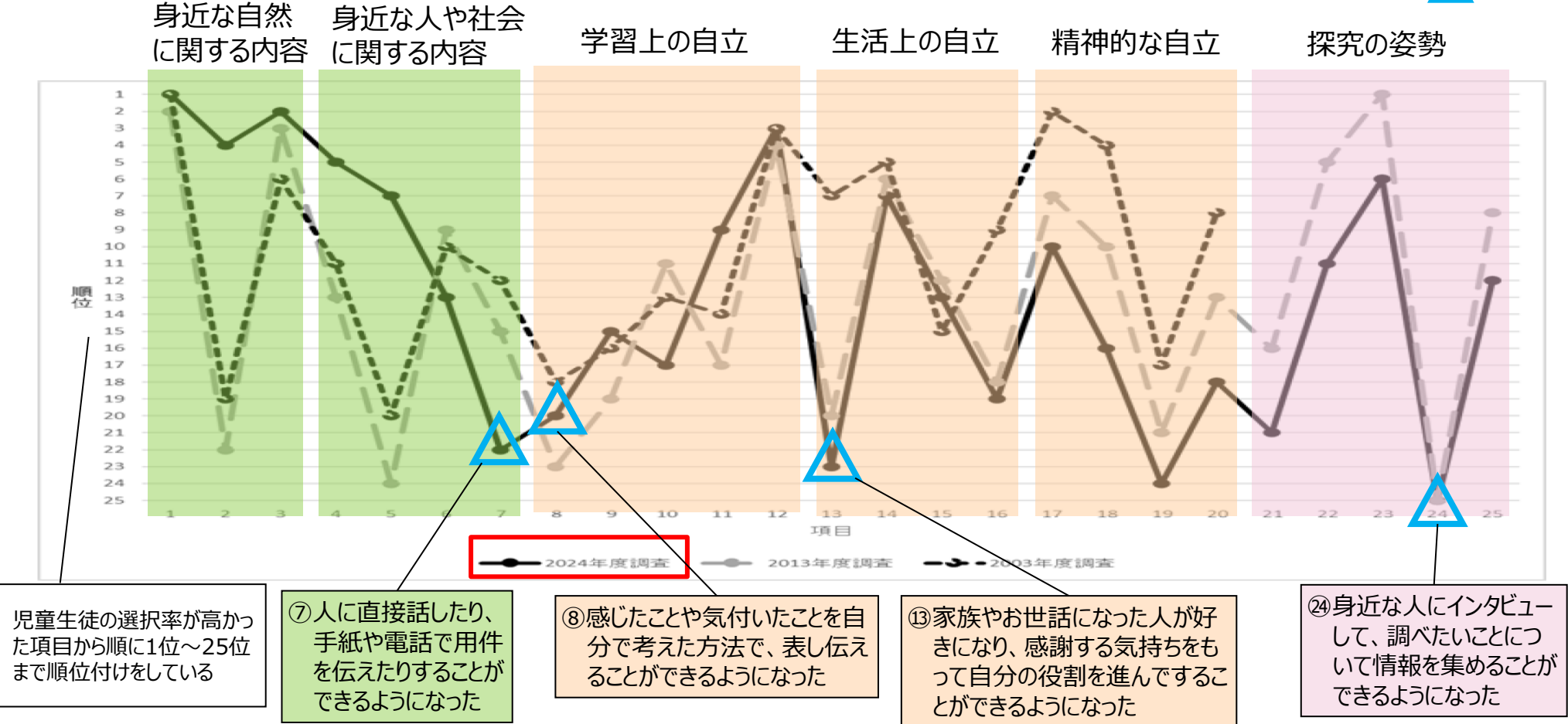
⑪悪臭や鳴き声に対する苦情 ⑫児童への感染症やアレルギーが心配 ⑬動物と児童との触れ合い指導方法が分からない ⑭飼育費、治療費などの捻出

⑮教職員の負担が大きい ⑯その他(具体的に記入)

多様な方法で表現する力の育成に課題

○生活科を学習したことで、自分にどんな力がついたと思うか、全25項目の中から複数選択可として回答を求めた結果

児童生徒の選択率が低かった項目 = △に課題



日本生活科・総合的学習教育学会「生活科で育った学力についての調査研究（令和6年 科研費）」
 ■調査対象：小学校3～6年生（676人）、中学校1～3年生（363人）、高等学校1～3年生（327人）
 ■調査人数：1366人